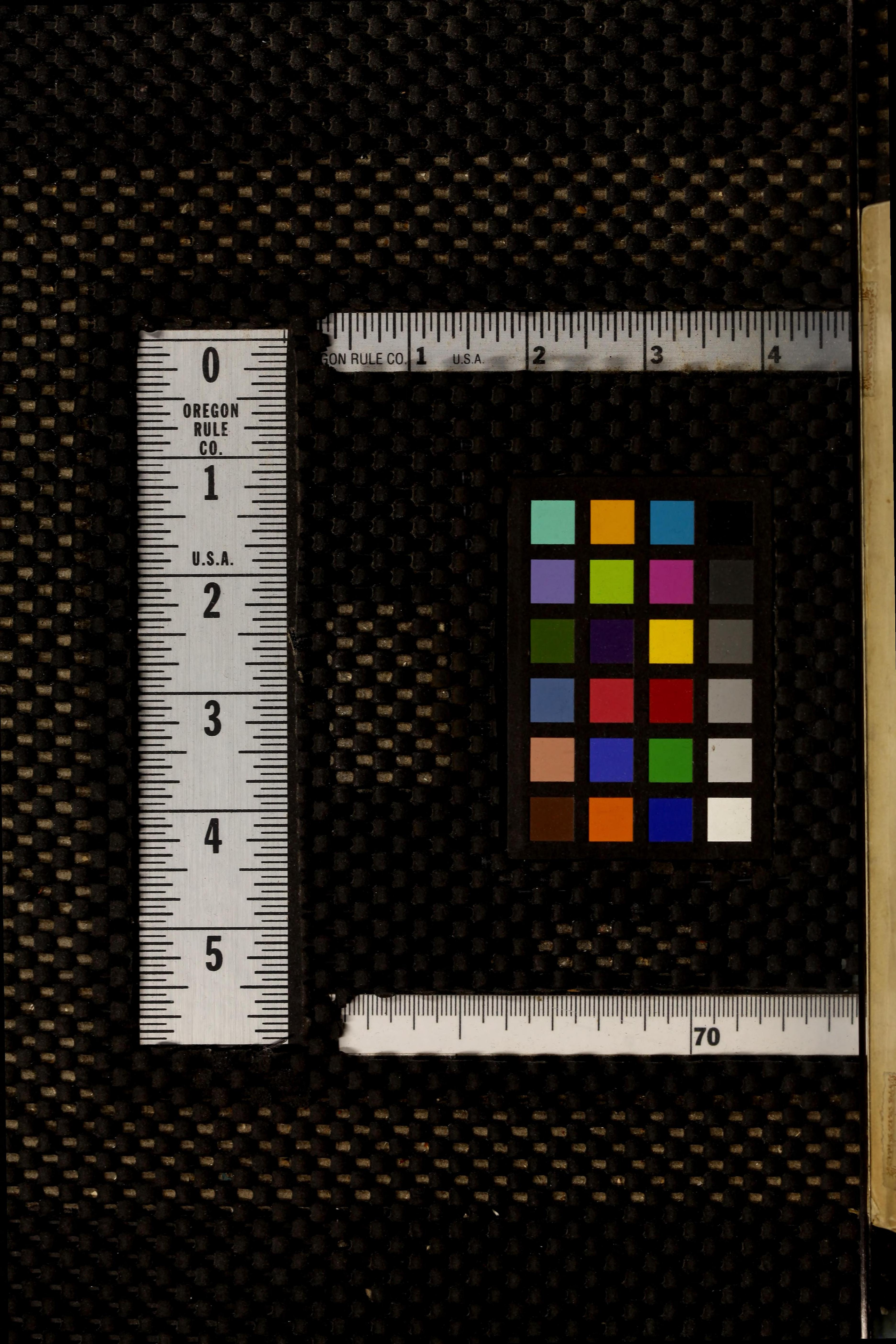
OREGON RULE CO.
U.S.A.
70

188

188 D

(普通出版)

永田廣志著

唯物史觀講話

白揚社上梓

哲學
1880
永久保存

圖書課長
事務
寄託
10,23
安寧不問

本書は弟隆佐の史的唯物論の發展過程とその第一期には弟佐の実践主義的傾向を代表する方面と絶対要求に従ってその特に民間思想に對する批判が第二期には観念論に對する批判がマルクスを経て唯物論の立場に於ける世界観の確立に於ける弟隆佐の思想的発展を実践に結びつけ弟隆佐の発展の年代を明らかにする。

弟佐の唯物論と散文論との平行、科学とその史的唯物論

弟隆佐の唯物論を批判の範囲に於て説明したものの

P. 48 94 136 139 142 147 148 149

不問

岡山県立図書館

B809
.8
.N324
1935
vol. 1
copy 1
Hsiao
Japan
Cage

Nagata, Hiroshi
v. 1
[1935]

唯物史觀講話

永田廣志著

白揚社上梓

LC Control Number
00 509302

目次

第一章　辯證法的および史的唯物論の背景……三—二五
第一節　全體的世界觀としてのマルクス主義……三
第二節　理論的背景……六
ドイツ古典哲學——六、古典經濟學——九、空想的社會主義——一二、自然科學——一五
第三節　社會的背景……一七
イギリス——一八、フランス——二三
第二章　辯證法的および史的唯物論の發展……二六—三七
第一期——二六、第二期——三〇、第三期——三二、現在——三五
第三章　唯物論と觀念論……三八—七三
第一節　哲學における二つの方向（唯物論と觀念論）……三八
哲學の根本問題——三八、觀念論の成立條件とその役割——四一、唯物論の科學性と進歩性——四四、最も徹底的な唯物論としての辯證法的唯物論——四六
第二節　觀念論の主要形態……五〇

主觀的觀念論——五〇、カントの二元論——五五、ヘーゲルの客觀的觀念論——六〇
第三節　形而上學的唯物論……六六
第四章　辯證法的唯物論……七四—一三〇
第一節　辯證法的唯物論の對象……七四
第二節　辯證法的唯物論の認識論の基礎……七八
物質・運動・空間・時間——七八、意識——八二、感性と思惟——八五、相對的眞理と絕對的眞理——八七、認識の發展における實踐の意義——九〇
第三節　認識論としての唯物辯證法……九五
第四節　唯物辯證法の主要法則……九九
對立物の統一——九九、質と量——一〇五、否定の否定——一〇八、現象と本質・法則——一一三、形式と內容——一一五
偶然性と必然性——一一七、可能性と現實性——一一九、交互作用と因果性——一二一、抽象と具體——一二三
第五節　唯物辯證法と形式論理學……一二五
形式論理學の根本特徵——一二五、折衷主義と詭辯論——一二七、形式論理學の辯證法的克服——一二九
第五章　科學としての史的唯物論……一三一—一五〇
第一節　序說……一三一

辯證法的唯物論と史的唯物論——一三一、史的唯物論の科學的地位と社會的役割——一三二

第二節　史的唯物論の根本命題……一三七

社會的存在と社會的意識——一三七、社會經濟的構成と上層建築——一三九、政治過程——一四三、史的唯物論の科學的意義——一四七

唯物史觀講話

第一章　辯證法的および史的唯物論の背景

第一節　全體的世界觀としてのマルクス主義

辯證法的唯物論および史的唯物論はマルクス主義の一構成部分である。だからそれを理解するためには、まづマルクス主義の理論的內容を一應知つて置くことが必要である。併しながらここではマルクスの學說の詳しい叙述は省略して、ただ辯證法的および史的唯物論の理論的背景、源泉を明かにするといふ觀點からのみ、問題をとり上げる。

周知のやうに、マルクスの學說の體系は哲學、經濟學および社會主義の三大部分に分れ、そしてこの三つの構成部分は互ひに內的に不可分に結合して、一つの全體的世界觀――プロレタリアートの世界觀――を形成する。その際、哲學においてはマルクス主義は唯物論であり、その唯物論は辯證法によつて豐富化されており、また從前の唯物論と異つて人間社會の理解へまで唯物論的見地を貫徹させたものである。云ひかへればマルクスの哲學は辯證法的唯物論であり、同時に史的唯物論にまで到達してゐることによつて、從前の唯物論から決定的に區別される。經濟學においてはマルクスは勞働價値說に基いて資本主義社會の運動法則を曝露し、この法則の把握に立脚して科學的社會主義の理論を創始した。

史的唯物論は辯證法的唯物論の立場において社會發展の一般法則を考究するものであつて、それは、政治形態やイ

デオロギー（精神文化）の形態が社會の經濟的構造の反映であること、社會の經濟的構造とは人間々の生産關係の總體の謂ひであり、その基礎には物質的生産力が横はつてゐて、生産力と生産關係の矛盾が社會發展の原動力であること、この矛盾は階級社會においては階級間の矛盾、抗爭として展開され、從つて矛盾の解決の鍵は生産力の發展の利益を代表する階級・・・のうちに見出されるといふこと、等々を明瞭ならしめる。

かやうな史的唯物論の見地から、マルクスは、資本主義社會の經濟的構造を究明するために經濟學に從事した。マルクスの經濟學においては、資本主義的社會經濟的構成は、それに固有な生産力と生産關係の矛盾を推動力として、運動するものとして、その發生、發展および・・・において、辯證法的に把握される。彼の勞働價値說は資本主義的生産力と生産關係の矛盾の展開の具體的內容の科學的分析の基礎に置かれてゐるものである。辯證法的方法と史的唯物論の見地なしにはマルクスの經濟學を理解することは全然不可能である。

社會の發展は人間の活動を通して展開される。だから社會の經濟的構造のうちに含まれる矛盾は人間々の矛盾として、從つて階級的差別に立脚する社會においては階級間の矛盾として表現され、その解決は該階級的矛盾の解決の形態において與へられる。ところで辯證法的理解によれば矛盾の解決、止揚は矛盾そのものの最後までの展開によつて可能なのであるから Klassenkampf の非和解的な展開を通して初めて一定の社會の經濟的構造の矛盾は止揚される。

そこで、マルクスにとつては、資本主義の矛盾を止揚する新社會は、空想的社會主義者におけるが如く單なる主觀的理想・道德上の要求として想定されるのではなくして、資本主義社會の現實そのものの辯證法的發展の歸結である。マルクスの社會主義學說はかやうに資本主義社會の發展の客觀的法則の認識に立脚してこの社會の矛盾を積極的に展開

する。從つて、解決する地位に置かれてゐる勞働者階級の Klassenkampf の諸方策を論述するものである。

このやうにマルクス主義の各々の構成部分は互ひに密接に內的に聯關し、一つの强固な全體的世界觀へと統一される。そしてこの世界觀は、科學的社會主義の學說に於ける勞働者階級の世界史的役割の解明においてその・・・尖端を有するといふ事情に基いて、直ちに勞働者階級（プロレタリアート）の世界觀として規定される。

そこで、マルクス主義の哲學なり、經濟學なり、社會主義學說なりの、どの部分を修正しようとする試みも、マルクス主義の全體系の修正に導かざるを得ない。かくて例へば、實踐的にはブルジョア自由主義の影響をうけ、哲學的には新カント主義の影響をうけて十九世紀九十年代に現はれたベルンシュタイン流の修正主義は、哲學の領域において辯證法的唯物論（從つてまたその社會觀への適用としての史的唯物論）を否定すると共に、經濟學の領域においては資本主義下における生產力と生產關係の矛盾の現存を否認もしくは過小視し、勞働價値說に對して疑問を提出し、政治の領域においては Klassenkampf の意義を否定し、社會の辯證法的な飛躍的發展の觀念に代へるに無限の彼方なる社會主義的理想に向つての平和的、漸次的、連續的發展の觀念を以つてした。だから、カウツキーの如く、哲學の方面においては觀念論者であつてもマルクスの社會＝經濟學說を完全に受け容れることが出來、そしてその限りマッハ主義者もマルクス主義者であり得るとか、プレハーノフの如く、哲學においてはカント主義者であつても社會＝歷史理論においてはマルクスの學說の信奉者たることが可能である、抔と見做すのは理論的に誤謬であり、本質上それはブルジョアジーに呼應してマルクス主義を解體させる者への妥協を意味する。マルクス主義はプロレタリアートの世界觀として、一つの不可分な全體を形成し、その各々の部分は互ひに密着し、統一されてゐるといふことをつねに

念頭に置かなければならない。

第二節　理論的背景

先に述べたやうな、マルクス主義の全體性といふ觀點に立つならば、辯證法的および史的唯物論の理論的源泉を語るに當つては、一般にマルクス主義の理論的源泉を明かにすることが必要である。

通常、マルクス主義の前記三つの構成部分に關聯して、ドイツ古典哲學、イギリスの古典經濟學、フランスの社會主義學說がその三つの源泉として擧げられる。

ドイツ古典哲學

ドイツ古典哲學は辯證法を遺した。しかし、第三章で見るやうに、ドイツ古典哲學において、特にヘーゲルにおいて、最も全面的に展開された辯證法は觀念論の枠のなかに歪め込まれ、神秘的粉飾をほどこされたものであつた。辯證法は發展に關する最も全面的な、最も深刻な、最も內容豐富な學說であり、また現存するものの肯定的理解のうちにその否定、その必然的沒落の理解をも包含し、何ものにも畏怖せしめられず、その本質上批判的なものであるにかかはらず、ヘーゲルにあつては辯證法のこの鋭鋒はキリスト敎および當時のプロシヤ王制を辯明するが如き保守的な體系の內部に押し籠められてゐた。そこで、ヘーゲル辯證法における正しい要素、合理的萠芽をその觀念論的外被の下から解放して、科學的に改造し、發展させるといふことが、殘された課題であつた。かやうな課題が、唯物論を受け容れるまでに進步的な階級もしくは階級分派のイデオローグによつて解決されなけれ

ばならなかつたことは勿論である。

ところでヘーゲルの死（一八三一年）後、ドイツではブルジョアジーの急進的分派が成熟し、そのイデオローグはギリスト教に對して鬪爭を開始し、終にフォイエルバッハにおいて唯物論に到達した。だがフォイエルバッハは單に觀念論的體系の破壞者であつたといふ一事によつてのみ、換言すれば、唯物論哲學の宣揚といふことによつてのみ、從つてただマルクスやエンゲルスの如きヘーゲル辯證法の信奉者を決定的に唯物論に轉向させたといふことによつてのみ、辯證法の唯物論的改作に貢献してゐるのであつて、彼自身はヘーゲルの辯證法をも排除して、本質上、十七＝八世紀型のブルジョア唯物論に復歸した。

そこで、ドイツ古典哲學の最大の達成としてのヘーゲル辯證法の批判的攝取の任務を遂行したのは、マルクスとエンゲルスである。この兩思想家は、現存ブルジョア秩序の批判への適用においてヘーゲル辯證法を唯物論的に改作した。かやうにしてドイツ古典哲學はマルクス主義の、特にその哲學の、源泉となつてゐる。

だがヘーゲル辯證法がマルクス、エンゲルスにおいて唯物辯證法に轉化するためには、ただフォイエルバッハの唯物論のみが必要であり、一切は哲學の範圍で濟まされた、と考へるのは大なる誤解である。ヘーゲル辯證法が唯物辯證法に轉化し、かかるものとして展開されたのは、特にブルジョア社會の批判への適用を通してであつたといふことを無視してはならない。

フォイエルバッハが宗教批判をもつて停止したとすれば、マルクス、エンゲルスにとつて肝要なのは政治批判であつた。彼等は急進的民主々義者としてその社會的活動を開始した。だが彼等は、イギリスやフランスにおいて既に實

現されており、そして後れたドイツにとつてはその實現が當面の課題であつたところのブルジョア民主々義の意義と役割を、先進諸國におけるブルジョア的秩序の發展史について究明し、それによつて一方では「政治的國家」やイデオロギーは「市民的社會」（社會の經濟的構造）の反映であるといふ史的唯物論の見解に到達し、他方ではブルジョア民主々義が「人間の解放」を意味せず、ブルジョア社會にはプロレタリアートとブルジョアジーの對立があり、そして前者の成長のうちにこの對立、從つてブルジョア社會の矛盾の・・の鍵があるといふことを發見した。ここにおいてマルクス、エンゲルスは社會主義者に、プロレタリアートの思想家に轉化した。

かやうにしてマルクスとエンゲルスが政治批判の展開を通して史的唯物論に到達し、ブルジョア社會の矛盾を發見するに當つて、古典經濟學と空想的社會主義が少なからぬ役割を演じ、そのことによつてドイツ古典哲學と共にマルクス主義の理論的源泉となつた。彼等は資本主義の批判者としてあらはれてゐた空想的社會主義の諸學說に親しむことによつて容易にブルジョア社會の矛盾を發見したばかりでなく、Klassnkampf の意義についてそこから學ぶ所が少なくなかつた。そして彼等の經濟學的研究も、單に資本主義的生產樣式の秘密を曝露せるマルクス經濟學の生誕の條件となつたのみでなく、亦それを通して生產力と生產關係に關する史的唯物論の見解の生誕にも聯關を有しており、かくしてまた史的唯物論の見地に立つ辯證法的唯物論の認識論――認識の發展は生產力、從つて生產關係の發展に依存するといふ命題に立脚する認識論――の生成に對しても、幾多の媒介の環を通してではあるが、聯關を持つてゐることは明かである。他面においては、マルクス、エンゲルスはヘーゲルから學び取つた辯證法の助けをかりて初めて古典經濟學や空想的社會主義の批判的攝取に成功した、と言ふことも出來る。

要するにマルクス主義の三つの源泉は、互ひに浸透し合つて、初めてマルクス主義の構成部分へと發展したものである。だから、辯證法的および史的唯物論の基礎命題が全幅的に論述されてゐる「ドイツ・イデオロギー」（一八四五＝六年）がマルクス、エンゲルスの手で書かれるまでには、この二人の思想家は、すでに從來の社會主義學說について深く研究し、同時に經濟學についてもすでに基礎的研究をなしとげてゐた。

そこで、イギリスの古典經濟學とフランスの社會主義の根本的見解を一瞥しよう。

古典經濟學

イギリスの古典經濟學はアダム・スミスとダヴィッド・リカードによつて代表されたものであつて、その功績は勞働價値說を準備したことにある。勞働價値說とは、商品の價値（交換價値）の實體が勞働でありその大いさは該商品の生產に要する社會的必要勞働時間の大いさによつて規定されるといふ學說である。スミスは未だ勞働價値說を明確に仕上げず、その立場から資本主義經濟を說明することが出來なかつた。賃銀、利潤、地代等を勞働量による商品の價値規定といふ見地から、即ち勞働價値說から說明し得なかつたために、彼は、この學說は勞働者や資本家や地主の存在せぬ單純商品生產者（自身の生產手段と自身の勞働のみを持つて商品を生產する者）の社會においてしか妥當しないと見做した。リカードはスミスの矛盾、混亂を除き、勞働時間によつて商品の價値が規定されることを確定し、そしてこのやうな價値法則が資本主義經濟の法則であることを指摘した。だがブルジョアとしての彼は、同時にこのやうな資本主義的法則を永久的自然法則と見做した。これがために彼は勞働價値說を徹底させて資本主義の秘密を剔抉し、科學的に解明することが出來なかつた。彼は、「商品に支出された勞働の量」よりも、「この商品をもつて購買し得る勞働の量」の方が大であるといふ事實（この事實のうちに資本家の利潤は成立する）

を確認するのみで、その原因を解明し得なかつた。これは、勞働價値說を徹底させたマルクスによつて初めて成し遂げられたことである。

マルクスは、一切のものを歷史的發展において捉へる辯證法に從つて資本主義を固定不變のものとしてでなく歷史的に生成したものとして把握し、資本主義は、商品生產が或る程度に發展して、勞働力が商品として賣買されるやうな歷史的段階において發生する、といふことを見出した。資本主義的商品生產が單純商品生產と異る特質は、前者においては賃銀勞働者が生產に直接に從事してゐるといふことである。勞働者が賃銀をもつて資本家に雇はれることはとりも直さず自分の勞働力を商品として資本家に賣ることであり、資本家はその勞働力をもつて自己の商品を生產せしめる權利を所有する。ところで勞働力の價値は、あらゆる商品の價値と同樣に、その生產、從つて再生產に（即ち勞働者とその家族の生計の維持に）要する社會的必要勞働時間の大いさによつて規定される。例へば一日六時間の勞働の生產物によつて勞働者としての社會的に平均な生計が維持されるとすれば、そのとき勞働力の價値の實體は、六時間分の勞働であり、これが賃銀の標準となる。然るに資本家は、勞働力をその價値通りに買ふとしても、勞働者をしてその勞働力の價値以上の商品を、つまり價値を生產せしめることが出來る。そこで、勞働力の價値が一日六時間の勞働によつて規定されるときに、一日十二時間働かせるとすれば、殘りの六時間分の勞働の生產物は勞働力の價値を超過する餘剩價値の結晶であり、これが資本家の利潤の源泉である。資本の蓄積とは餘剩價値が全部資本家の個人的消費に充てられないで、その一定部分が絕えず資本に轉化することである。かくて資本主義的生產の發展は餘剩價値の生產、資本家の致富を動因とするものであつて、それは、生產關係の領域において一方では少數資本家の手にま

す〳〵富が集積、集中し、他方では資本家のために餘剰價値を生産する勞働者の階級がます〳〵成長するといふことを制約する。資本主義の生産力と生産關係の矛盾の核心は餘剰價値の生産のうちに包含される。

このやうにマルクスは勞働力の範疇を明確に把握し、それに價値法則を適用して科學的な餘剰價値說を打ち立て、それによつて資本主義社會の秘密を曝露し、社會主義に科學的基礎を與へた。それまでは、社會主義は空想的であつて、社會發展の法則の唯物論的、科學的理解に基礎を置いてゐなかつたのである。例解のために、空想的社會主義の三大代表者と云はれるフランス人サン・シモン、シャルル・フーリエ、イギリス人ロバート・オーエンの學說の根本的特徵を見よう。

空想的社會主義

サン・シモンは近代社會の歷史を封建制に對する「生産階級」の鬪爭の歷史として把握した。「生産階級」とは、彼によれば、ブルジョアジーをも、勞働者をも、農民をも包括する階級である。サン・シモンは彼のいはゆる「生産階級」の內部に深刻な矛盾が存在することを認めず、「有閑階級」（貴族や官僚）の支配に代へるに「生産階級」の支配をもつてすることを理想とした。で、「生産階級」によつて支配される社會秩序を、彼は「産業體制」(Système industriel) と名づける。この體制においては經濟上の支配權は「産業家」に屬し、知的生活における指導權は學者に屬さなければならない。そこではまた勤勞が社會生活の原理であつて、一切の特權や相續權は廢止され、各人は社會への貢獻の程度に應じて社會から報酬を受取る。「産業體制」の社會の全經濟生活は大農業家や企業家や商人から成立する「産業家協議會」によつて統制され、社會的生産の無計畫制、自由競爭は廢止されなければならない。サン・シモンはこのやうな社會が勞働者階級の福祉を增進せしめるといふことを疑はなかつた。そこ

で、彼はブルジョアジーとプロレタリアートの對立に對して目を閉じ、兩者の調和のうちに社會進歩の保證を見た。

サン・シモンの學說を理解するには、一七八九＝九三年の大革命の結果、支配階級となつたブルジョアジーにとつて封建的反動の脅威が未だ殘存し、他面において勞働者階級が未だ組織されてゐなかつた十九世紀初頭のフランス、特にその王制復古期（一八一五年――ナポレオン沒落の翌年――から一八三〇年におけるブルボン王朝の沒落まで）の情勢を考慮に入れる必要がある。「有閑階級」の支配に對する鬪爭がブルジョアジーにとつてもプロレタリアートにとつても當面の課題であつた時代においては、サン・シモンの如き先進的な思想家も未だ「生產階級」の內部における矛盾を正當に把握することは出來なかつた。

しかし乍ら近代史を封建貴族に對する「生產階級」の Klassenkampf として觀察したサン・シモンの見地は、ギゾー、チエーリ、ミニエの如き王政復古期の歷史家においても明確に展開されてゐるものであるが、史的唯物論の先行思想として重要なものである。特にサン・シモンについて指摘すべきは、彼が一七九三年を頂點としたフランス大革命のうちに、單に「有閑階級」に對する「生產階級」の鬪爭でなく、有產者に對する無產大衆の鬪爭を見たといふことである。これはエンゲルスの云つたやうに、當時においては天才的な發見であつた。併しながら當時のプロレタリアートの未成熟なために、その役割、意義を認識することは不可能であつたから、サン・シモンは有產者に對する無產者の反抗を正しいと認めず、有產者たるブルジョアジーと生產者なる無產者の間には調和がなければならぬし、またあり得ると見做し、兩者間の矛盾の必然性を理解しなかつた。

フーリエは資本主義の批判においてはサン・シモンよりも著しく痛烈であり、詳細であつた。彼は勞働者階級に强

く同情し、近代文明社會の勞働者は野蠻人よりも劣惡な狀態にあるといふことを指摘し、文明社會の主要特徴として自由競爭、心身を蝕む勞働、經濟生活における無秩序、そしてその結果としての恐慌、貧富の差の增大等をあげ、これらの害惡の原因を彼は個人主義的（又は精々家族的）原理の上に建てられた勞働組織のうちに見出した。そこで彼は共同的勞働を原理とする社會秩序を案出し、この秩序は千五六百人から成る勞働上の組織（彼はそれをファランジュと名づけた）を單位とするものと想定した。ファランジュにおいては勞働は愉快であり、各人の天性の自由な發展を保證する。

かやうにしてフーリエも資本主義そのものの發展法則の認識に基いて、この客觀的發展からの必然的歸結として社會主義を結論する代りに、資本主義の害惡を捨象した一つの理想社會を空想するより以上に出なかつた。しかもその理想社會の細胞たるファランジュにおいてすら資本の提供者に對しては一定の報酬が約束され、種々の位階や稱號が制定さるべきであると見做されてゐる。これは、フーリエが、サン・シモンと同じく、プロレタリアートの役割を認識しなかつたために、ブルジョアジーをも引き入れなければ社會主義は實現され得ない、と考へたからである。

オーエンは工場經營者であり、勞働者の悲慘な狀態を目擊して、いはゆる溫情主義者としてその活動を開始した。しかし彼はやがて現代社會の經濟體制は新しい經濟體制によつて代へられなければならないといふ思想に到達した。新しい體制においては生產手段の共有が基礎に横はり、そこでは「各人に物的および精神的の、眞の富の最大量が保證」されるから、富の分配の不公平や個人的貯蓄は恰かも水や空氣の場合と同樣に無益となり、無意味となる、と彼は考へた。彼はかやうな見解に基いて、一八三〇年代末から四〇年代初めにかけてアメリカで社會主義的コロニーの

建設を實行した（もちろんそれは失敗に歸したが）。

ところで全社會の改革は如何にして實現されるかといふに、オーエンによれば、それは協同組合を通してである。彼の指導下に協同組合や、勞働者相互間の交換市場が創立され、彼の主張に共鳴した多數の手工業者や勞働者の間には勤勞者の經濟的團結による全社會の改革といふ思想が廣まつた。彼は立法的に勞働者の狀態を改善することにも多大の努力を費した。併しながらオーエン主義の特徴は、かやうな政治的手段は高々部分的改良に役立つ位なもので、社會改革への途は正に經濟を媒介として、即ち協同組合を媒介として與へられる、といふ主張である。彼は從つて資本家階級に對する政治闘爭を認めず、彼にとつてはストライキさへも正當なものではなかつた。

すべての上述のことによつて明かなやうに、空想的社會主義の特質は、社會の客觀的發展法則の認識に立脚せず、資本主義の下でさいなまれてゐる人間性なるものの自由な發展に照應する社會秩序を構想してゐること、從つてもちろんプロレタリアートの役割を認めず、一般に Klassenkampf を、特に一切の政治闘爭を社會主義の實現のために無効果なものと斷定してゐること等である。十九世紀前半におけるフランスの社會主義者のうち、政治闘爭の意義を認め、その見地からヒロイックな活動を展開したのはオーギュスト・ブランキ（彼はその七十六年の生涯の中三十五年を刑務所で過した）とテオドル・デザミー位である。しかし彼等は政治闘爭の意義を一面的に强調したこと、勞働者階級の廣汎な層を地盤とすることを必要と見做さず、先進的少數者の結社をもつて充分と考へたことにおいて、未だ空想的社會主義の範圍を脱却しなかつた。

サン・シモン、フーリエ、オーエンの社會主義學說はその種々の缺陷にもかかはらず、勞働者階級が組織上でも思

想上でも未成熟であつた當時においては非常に進歩的な役割を演じた。「彼等は勞働者の啓蒙のために最高度に貴重な材料を提供した」（マルクス、エンゲルス）。で、史的唯物論が彼等の遺産に多くを負つてゐることはすでに述べた通りである。併しながら理想社會に關する彼等の未熟な觀念論的見解と非政治主義との傳統は勞働者運動の發展に伴つて多くの害毒を與へた。この傳統の下に立つてゐたルイ・ブランや、プルードンの小ブルジョア的社會主義は一八四八年にはすでにその反動性を露呈した。オーエン主義も短期間に勞働者の間でその影響を失はなければならなかつた。現在においてはオーエンは小ブルジョア的な協同組合（日本においてはそれは産業組合の名の下に、主として地主と富農のために、半封建的農業關係の維持手段として普及し、最近ではファッショ的經濟政策の遂行手段として利用されようとしてゐる）の開祖として讃美され、「産業家協議會」による國民經濟の計畫化に關するサン・シモンの見解は西ヨーロッパ、特にイタリーにおいてファッショ的似而非統制經濟の理論に變質せしめられてゐる。

自然科學

最後に吾々は、辯證法的および史的唯物論の理論的背景について語る場合には、マルクス、エンゲルスの時代における自然科學の狀態を多少なりとも心得てゐなければならない。何故なら自然の唯物辯證法的把握が不可能であるならば、辯證法的唯物論も、從つて史的唯物論も成立しないし、また發生し得ないからである。だが自然の唯物辯證法的理解が可能なためには、自然は變化し發展するものであり、種々の自然過程は物質の種々の運動形態として互ひに結びついており、互ひに轉化するといふことが自然科學的に明かにされることが必要である。

そこで、十五世紀後半に始まる近代自然科學の發展を見るならば、十八世紀までは力學とその補助科學としての數學が唯一の發展した科學であつて、物理學、化學、生物學等は未だ全く幼稚な段階にあつた。そしてニュートンによ

つて大成された近代力學は自然における進化、發展を認めず、ただ循環を認めたにすぎなかつた。このやうな非辯證法的な形而上學的見方は當時の自然觀を支配し、例へば生物分類によつて多大の功績を殘したリンネは神の創造せる動植物の種の不變性を信じて疑はなかつた。十八世紀の唯物論者の自然觀はこのやうな形而上學的見方に基いたものであつた。で、十八世紀後半にはカントとラプラスの星雲說が現はれ、一切の天體は星雲の團塊から進化したものだといふことが科學的に立證されたにかかはらず、すべての自然領域の進化に關する觀念は未だ科學的に確證されてゐなかつた。十九世紀の初めにはラマルクが生物の進化を主張したとはいへ、一八三〇年にフランスの「科學アカデミー」において行はれたラマルクの門弟サン・チレールと進化論の反對者キューヴィエーとの間に行はれた永きにわたる有名な討論において、勝利は後者に歸したものと見做されてゐた。從つて當時までは形而上學的自然觀は未だ打破されておらず、辯證法論者ヘーゲルさへも自然觀においては形而上學的見方に捕はれてゐた。進化論が決定的に勝利を占めたのは一八五九年にダーウィンの「種の起源」が出てからであつた。しかしながら他方では、すでに十九世紀初頭に種の進化に關する思想が現はれてゐた（ドイツにもゲーテやオーケンの如き進化論の先驅者があつた）といふことは、一八三〇年に地殼の發展を證明したライエルの地質學が現はれたことと共に、マルクス主義哲學の發生の理解のために無視してはならない事實である。

また十九世紀に入ると共にドルトンの原子論によつて化學が確立され、有機化學も起り、化石學は地質學と相俟つて古生物學の發展を促し、生理學は三〇年代にシュヴァン、シュライデンによる細胞の發見によつて科學的基礎を與へられ、物理學は四十年代におけるマイエル等のエネルギー恒存および轉換の法則の發見によつて、力學的力、熱、

輻射、電磁氣、化學的力等がエネルギーの特殊な形態であり互ひに轉化するものであつて、種々の自然現象の間には形而上學的な絶對的な境界は存在しないといふことを明かにした。

マルクス、エンゲルスは、資本主義的生産力の著しい發展、マニュファクチュア時代から大工業の時代への推移の時代、即ち産業革命の時代に現はれたこれらの學説の概括に基いて、辯證法的唯物論を自然觀の領域において具體的に展開しようと試みた（特にエンゲルスの後期の著作「反デューリング論」および未定稿「自然辯證法」）。エンゲルスは細胞説、エネルギー説および進化論をもつて十九世紀の三大發見となし、これによつて自然の辯證法的理解が可能にされたと見做してゐる。自然科學の最新の發展水準に立ち、その成果を唯物辯證法的に概括するといふことは、マルクス主義哲學の重要課題の一つであるし、またさうしてのみそれは、生きた、發展する、眞に科學的な哲學たりうるのである。

このやうにして吾々はマルクス主義が全人智の發展を背景に持つところの壯大な、一切を包括する世界觀であることを知り得る。

第三節　社會的背景

辯證法的および史的唯物論の理論的源泉が明かになつた上で、今度はその社會的、歴史的、階級的基礎を明白にしなければならない。第一に、マルクス主義の源泉として役立つた十九世紀前半の種々の學説も當時の社會狀態の産物

であり、第二に、マルクス主義はそれらの學說の解釋學的檢討から發生したのでなく、それらの學說を當時の社會的現實の分析、具體的な政治批判に即して吟味し、改造し、發展させたものであり、第三に、マルクス主義のその後の發展の窮局の根據も社會の歷史的發展のうちにある、といふことを閑却してはならない。つまり、マルクス主義、從つてまた辯證法的および史的唯物論の發生および發展の社會的根據は、一言でいへば資本主義的生產の發展によるプロレタリアートの擡頭といふ點に見出される。そこで、マルクス主義哲學の確立（一八四五＝六年）前後における先進諸國の勞働者階級の狀態を大づかみに鳥瞰しよう。

十八世紀末から一八四五＝六年にかけての歷史は、イギリスおよびフランスにおける勞働者階級の成長をもつて一大特徵とする。

イギリス

イギリスにおいては勞働者階級が階級として形成されたのは產業革命の過程においてである。產業革命は、機械の應用による手工業的技術の驅逐を基礎として、手工業およびマニュファクチュアが大工業のために壓倒されることを意味し、その結果、一方では勞働者の失業や生活惡化が起り、他方では大工場への勞働者の集結が行はれる。イギリスの產業革命は十八世紀後半に先づ纖維工業から始まり、迅速に他の生產部面に波及し、十九世紀前半にはすでに完了した。そしてこの過程において資本に對する勞働者の反抗は普遍的現象となつて現はれ、勞働者は近代社會における一つの特殊な利害を有する階級として明確に歷史の舞臺に登場した。「イギリスにおける勞働者階級の歷史は十八世紀後半に、蒸汽機械と棉花加工用機械の發明と共に始まる」とエンゲルスは云つてゐる。

產業革命の開始によつて、機械のために驅逐された勞働者や手工業者は、最初、機械の採用禁止に關する請願（例

へば一七九四年における梳毛工および一八〇八年における織匠の請願）を試み、その無効果性が明白になると共に、彼等の間には機械破壊の運動が勃發した。勞働者や手工業者による機械の破壊は從前にも行はれ、それがために一七六九年には機械破壊者に死刑を課する法律が出された位であるが、十九世紀の最初の四半期におけるそれが普遍的、全國的な現象となつたことはなかつた。だがそれは、資本に對する勞働者の抗議の最も原始的な形態であつて、經濟的發展の見地からみれば反動的であり、それだけにまた勞働者階級の上にも何んら有利な効果をもたらさなかつた。

併しながら勞働者はやがてその抗議を機械に對して向ける代りに、機械の資本主義的利用に對して向けなければならぬことを悟り始めた。そこで運動はより高い形態、即ちストライキの形態をとつてあらはれた。機械の破壊が大工業のために沒落せしめられた手工業や混成マニュファクチュアの勞働者によつて行はれたとすれば、ストライキは機械を使用する工場の勞働者によつて行はれた。後者はその生活條件の故に、機械に對して鬪はないで、機械の應用の資本主義的諸條件（低賃銀、勞働過度、失業の脅威等）に對して鬪はざるを得なかつた。すでに一八一六年には隨所にストライキが勃發し、一八年にはランカシヤの纖維勞働者の大罷業があり、一九年にはマンチェスター近郊における勞働者の集會に對する干渉に答へてストライキの波が再び高まり、二〇年にはスコットランドの諸工場において勞働爭議が止まなかつた。二四年にはストライキは特に大きな規模をもつて現はれ、これに吃驚したブルジョアジーは遂に勞働者の結社禁止に關する法律を撤廢した。これに促されて多數の勞働組合が自生的に組織され（一八三〇年には全國的な組織が生れた）、そして運動は單なるストライキ鬪爭から次第に政治運動に發展した。

勞働者は選擧權獲得の運動を開始し、それは一八二九年から三二年の選擧法改正に至るまでの間に最も活潑に戰は

れた。だがこの運動は議會において貴族＝地主に對して優位を占めようと意圖したブルジョアジーの爲に利用され、勞働者階級は結果において目的を達しなかつた。この失敗はやがて勞働者運動を一層高い段階に押しやつた。一八三五年に始まり、一八三七年の恐慌をきつかけとして全國的に燃え上つたチャーチスト運動がこの段階を代表するものである。それは十五年の間イギリスを震憾せしめた最初の全國的な戰鬪的勞働者運動であつた。それは、初め、六箇條（すべての成年男子の普通選擧權、議員への歲費、議會の年次改選、無記名投票、平等選擧區、議員候補者の財產資格撤廢）を含む「人民憲章」を請願によつて獲得する（但し大多數のチャーチストにとつては六ケ條の實現は勞働者階級が政權を握るための手段であつて、決して目的ではなかつた。）ための運動として展開され、一八三九年二月には請願運動の指導に當る最高機關たる「勤勞者階級の國民會議」が持たれた。併しながら會議は代議員間の意見の不統一や理論的未成熟のためにやがて政府のために制壓され、これに對して奮起した各地の勞働者も軍隊と警察のために慘敗を喫し、百五十萬人の署名ある請願は否決された。その後の打續く制壓と景氣恢復とのために運動は一先づ凋落し、これを機會にオーエン主義者ロヴェットによつて指導された小ブルジョア的な「同伴者」は脫落した。

一八三七＝三九年における、チャーチスト運動の失敗の原因を理解するためには、「道德的力」のみによつて六ケ條の實現を期さうとしたロヴェット一派に反對して「物理的力」の行使の必要を强調した勞働者的要素の代表者さへも、當時の勞働者が未だ手工業者又は農民としての自己の過去の心理から解放されてゐなかつたのに照應して、確固たるプロレタリア的世界觀を持つに至らなかつた（例へば眞のプロレタリアの指導者をもつて自任したオーコンナーは社會主義の反對者であり、より左翼的なオーブライエンさへも農業に對して工業が優位なるが如き社會制度の反對

者であり、ただハーニーだけがこの種の反動的見解から自由であつた)、といふことを念頭に置かなければならない。

「同伴者」をふるい落した勞働者は一八四〇年には全國的に統一されたチャーチスト協會(最初の勞働者政黨)に組織され、一八四二年には恐慌とストライキ運動の昂揚に直面して協會は勞働者にゼネストを呼びかけた。しかしその時はすでに遲く、分散的に行はれたストライキの波は退き、三百萬人を超える勞働者や市民の署名した協會の請願(この請願には多くの勞働者的な要求が附加されてゐた)も否決された。そして景氣上昇と共に、運動は再び衰退した。

チャーチスト運動の最後の昂揚は一八四七年末の恐慌に關聯しており、翌四八年四月をもつて終つてゐる。國民會議は再び召集され、第三回の請願が議會に提出された。しかし國民會議はその不決斷のために再び壓迫を受け、請願は通過せず、運動は一大失敗に終つた。

その後、運動はオーコンナーの卒ひる右翼とハーニーおよびジョーンスの指導せる左翼とに分れて殘存したけれども、もはや頽勢を快恢することは不可能であり、ハーニーおよび特にジョーンスを助けてチャーチストの再組織を計らうとしたマルクスとエンゲルスの企圖も効果を結ばなかつた。五十年代にはイギリスの産業は著しく上昇し、爾來イギリスのブルジョアジーは世界經濟におけるその獨占的地位の故に勞働貴族を最も早くから、且つ最も多く養成することに成功し、そのために勞働者運動は大體においてはブルジョア自由主義の精神によつて浸水されるに至つた。

イギリスにおける産業革命および勞働者運動、特にチャーチスト運動はマルクス、エンゲルスに重要な影響を與へた。プロレタリアートの歴史的役割、その Klassenkampf の進歩性に關する史的唯物論の命題が非常な程度にそこか

ら汲み取られたものであることは疑ひない。十九世紀四〇年代の前半においてすでにマルクスはイギリス勞働者の運動に多大の關心を持ち、特にエンゲルスはイギリスの事情の研究に沒頭した。その成果は彼の著書「イギリスにおける勞働者階級の狀態」（一八四五年）およびその他の諸論文となつてあらはれた。またマルクス主義のすべての部分についての天才的叙述を與へてゐる名著「マニフェスト」（一八四七―四八年）は、そのストラデキー・タクチックの部分においては、チャーチスト運動の經驗の分析、批判、概括に著しく立脚してゐるものである。

フランス

フランスはイギリスと多少異つた條件の下に見出された。ここでは産業革命はかなり後れて開始され、例へばイギリスにおいてすでに十八世紀八十年代から使用され始めたワットの發明した蒸汽機關は、フランスでは一八一二年に初めて工業に利用された。しかもそのテムポは緩漫で、十九世紀二〇年代に初めて紡績における産業革命が成功し、漸く三〇年代に入つて棉布、絹布、金屬の生産部面に強力に波及し始めてゐる（ドイツにおいては、産業革命の開始は一層遲く、且つそのテムポはのろく、漸く七〇年代になつて大工業が優位を占めるに至つた）。ここでは從つて、商業＝高利貸資本に從屬する資本主義的家内勞働や混成マニュファクチュアが資本主義的生産において大きな地位を占めてゐた。しかしフランス資本主義のこのやうな性質も手傳つて、資本主義の發展が勤勞者大衆にもたらす結果――小生産者の零落、低い賃銀、長い勞働時間、惡い住宅、失業等――は、ここでもイギリスに劣らず鋭くあらはれた。ここでも勞働者の運動は單に機械の破壞といふ形態においてのみでなく、またストライキの形態においても展開された。

しかも、一七八九＝九三年以來の運動への參加は、勞働者の政治的意識を高める上に大きな役割を演じた。

すでに一八一六年、二一年には機業中心地リオンに勞働者や手工業者の烈しい騷擾が起つた。

一八三〇年七月には勞働者を先頭として、民衆は、復活せる地主的＝貴族的反動の支配を覆へした。だが勝利の結果はいはゆる金融貴族の手に收められ、銀行家、株式取引所員、鐵道屋、鑛山主等の利益を代表するモナルヒーが樹立された。

一八三一年には賃銀問題からリオンに機業勞働者の暴動が起り、十日間にわたつて勞働者の・・・が行はれた。併しながら當時のリオンの機業においては大工場は未だ存在せず、資本家＝商人の支配の下に小經營者が賃銀勞働者をして生産に當らしめるといふ資本主義的家内勞働の形態が壓倒的であつた關係上、資本の收取に對する鬪爭の指導は小經營者によつて行はれ、これがために運動はその形態の尖鋭さにもかかはらず、意識水準においては低いものであつた。「暴徒」は共和主義者にすら耳をかさず、政府に對して忠誠を表明し、その派遣せる部隊の前に全く無抵抗に屈服した。

リオンの勞働者は一八三四年に再び起ち上つた。今度は、彼等の意識水準は共和主義者の反政府的宣傳や種々の勞働者、手工業者の組織の活動の影響をうけて著しく高まり、特に勞働者の組織が大きな役割を演じた。運動は勞働者の結社禁止に關する法律の發布に對して起され、最初から政治的な性質を帶びてゐた。だが一週間の市街戰の後「暴徒」は鎭靜され、リオンについでパリその他の工業都市において、奮起した勞働者も鎭められた。そしてこの失敗の後、勞働者や手工業者を主要成員とする多くの秘密な組織が作られ、就中プランキ等の指導した結社は一八三九年に直接的行動を起してゐる。ところでプランキ主義者は「創意ある少數者」の役割を過大視し、大衆と結びつかなかつ

た（暴動當時、結社の成員は八五〇人であつた）ために慘めに敗北した。

一八三九年から四八年まで、フランスは外見的には平穩であつた。しかしこの時代には勞働者の廣汎な層の階級意識が成熟し、ルイ・ブランやプルードンの小ブルジョア的な空想的社會主義が廣く普及し、また少數ではあるが先進的なプロレタリアはデザミーを支持した。一八四八年二月には、フランスの勞働者は、四五＝六年の凶作による食糧品の價格騰貴と一八四七年にイギリスから始まつた商業および工業の恐慌とに驅り立てられ、金融貴族の支配に對するブルジョア的反對派（その左翼はルドリュ・ローランを首領とする小ブルジョア的共和主義者であり、中間には穩和派共和主義者＝自由主義者がおり、右翼には産業大ブルジョアジーがゐた）の活動に促進されて、再び運動を開始し、モナルヒーを覆し、ブルジョアジーをして臨時政府にルイ・ブランと勞働者アルベール（リオンにおける第二回暴動の參劃者）を入閣せしめた。この瞬間からプロレタリアートとブルジョアジーの抗爭が前面に押し出された。ブルジョアジーはルイ・ブラン主義の弱點を利用して勞働者階級を農民から孤立させ、内部的に分裂させることに成功し、ブランキに指導された勞働者大衆の運動を壓伏し（五月十五日）、これに力を得てプロレタリアートに對する攻勢を開始し、後者を最後の場所まで追ひ込んだ。指導者を失ひ、絶望的狀態に陷し入れられた勞働者は、それにもかかはらず、パリにおいて六月廿四日から廿六日迄決定的な行動を展開した。それは結局、數萬の犧牲者を出して勞働者の敗退に終つた。けれどもそれは、勞働者運動に無數の貴重な教訓を遺した。それは近代社會の二大階級間の「最初の大きな抗爭」であり、全ヨーロッパを震憾させた世界史的事件であつた。

フランス勞働者階級のかやうな成長はマルクス主義の生誕に少なからぬ影響を與へてゐる。一八四三年の秋、パリ

に亡命したマルクスは、四八年を前にせるプロレタリアートの動きを直接に見聞し、亡命ドイツ人の組織した「正義者同盟」、その他のフランス勞働者の地下組織と親密に接觸し、それによつてブルジョア社會の批判の理論を研磨した。

以上で明かなやうに、イギリスやフランスにおける勞働者運動を除外しては、マルクス主義の發生を理解することは出來ない。

第二章　辯證法的および史的唯物論の發展

今度はマルクス主義、特にその哲學的方面の發展の跡を概觀しよう。ここでも吾々は、十九世紀四十年代後半以後の世界史の發展との聯關において問題を取扱はなければならない。

マルクス主義がそのすべての部分において出來上つて以後、その發展の第一期は一八四八年から一八七一年までの時代であり、第二期は一八七二年から一九〇四年まで、第三期は一九〇五年から一九一七年までである。その後を第四期として規定することが出來よう。そこで、これらの各時期の特質との聯關において、マルクス主義の發展の跡を鳥瞰しよう。

第一期

第一期は謂はば嵐の時代であつて、その始點をなす一八四八年の二月には先きに述べたやうにフランスに革命が起り、六月にはプロレタリアートとブルジョアジーの最初の大抗爭が行はれ、三月にはドイツに最初のブルジョア革命が勃發し、翌四九年春、自由主義ブルジョアジーの指導せる「フランクフルト議會」の解消を最後の幕として反動の勝利をもつて終つた。マルクス、エンゲルスは四七年に創立された國際的勞働者團體「コムニスト同盟」の指導的人物としてこれらの事件に關與し、就中ドイツの運動にはマルクスは「新ライン新聞」（四八年六月一日から翌年五月十九日までケルンにおいて發行）の主筆として參加し、またエンゲルスは右「同盟」員ウィーリッヒを扶けて南ドイツの民衆軍を指導した。彼等はブルジョア革命における勞働者階級の指導者として、全勤勞人民

の利益のために闘ひ、自由主義ブルジョアジーの裏切りを曝露し、ブルジョア革命における勞働者階級の役割を明白ならしめた。彼等が「コムニスト同盟」の委託をうけて四八年二月までに書き上げたところの「マニフェスト」の理論の眞實性は四八＝九年の事件によつて完全に・・され、小ブルジョア的社會主義の破綻は全く明白となつた。同時にフランスおよびドイツにおける經驗の吟味、概括はマルクス主義を一段と內容豊富ならしめ、特にストラテギー・タクチックの問題において著しく前進させた。マルクス、エンゲルスの論集「ドイツにおける革命と反革命」、マルクスの「フランスにおける階級鬪爭」、「ブリュメール十八日」、「ケルン共產黨事件の闡明」、「コムニスト同盟への檄」・エンゲルスの著作「ドイツ農民戰爭」等はいづれもこれらの經驗の分析に關聯したものである。後にレーニンはブルジョア民主々義運動における勞働者階級のタクチックの問題においてメンシェヴィキーと鬪ふに當つて、一八四八＝九年のドイツの經驗に關するマルクス、エンゲルスの分析に依據した。

五〇年代、即ち勞働者運動の沈靜期には、マルクスは主に經濟學の研究に沒頭し、その結果は「經濟學批判」（一八五九年）となつてあらはれてゐる。

五〇年代末から六〇年代にはドイツの民主々義運動や、イギリス、フランスの勞働者運動は再び活況を呈し、一八六四年には「國際勞働者協會」（第一インタナショナル）が創立され、マルクスとエンゲルスは、その理論的中心として、プルードン主義、バクーニンの無政府主義、イギリスの自由主義的な組合主義等と鬪ひ乍ら、各國の運動に統一的指導を與へることに努力した。またドイツでは六〇年代初めにラッサールの卒ゐる「ボナパルチズム的＝國家社會主義的」勞働者運動が起り、六九年にはマルクス、エンゲルスの直接の指導の下にベーベルとウイルヘルム・リー

プクネヒトが數年間の努力の後「アイゼナッハ社會民主黨」（後のドイツ社會民主黨の母胎。一口にアイゼナッハ派と呼ばれる）の創立に成功した。マルクス、エンゲルスはアイゼナッハ派を正しい方向に導き、ラッサール主義の反動性を曝露することに少なからぬ力を注いだ。ラッサールはストライキや勞働組合運動に對して否定的であり、普通選擧法をもつて勞働者階級の解放の最善の手段と見做し、一般に Klassenkampf の意義を理解せず、ブルジョア民主々義運動における勞働者階級と農民の役割を評價し得ず、それがために四八＝九年から未解決に殘されたドイツにおけるブルジョア民主々義的課題の中心たる民族的統一國家の形成といふ課題の解決を、最も反動的な階級たるユンカーに期待し、ユンカーの政治家ビスマルクを支持し、ビスマルクと取引して勞働者階級の利益を圖らうと企てた。加ふるに、ラッサールのこれらの見解の基礎には觀念論的辯證法が方法として横はつてゐた。從つてラッサール主義に對するマルクス、エンゲルスの批判は主としてタクチックの問題に關して重要な遺産を殘すと同時に、それに關聯して辯證法的唯物論の發展の上にも寄與するところが少なくない。

六〇年代にはこのやうに實踐的な問題の究明に主力が注がれたが、他面においてマルクスの生涯の大事業たる經濟學の研究も進捗し、一八六七年に大著「資本論」の第一卷が出た。ところで「資本論」は唯物辯證法を方法として、資本主義的生產樣式を、從つて資本主義的生產關係の下における生產力の運動を研究對象となし、同時に資本主義的生產關係の上に生ずるブルジョアジーの社會認識、イデオロギーとしてのブルジョア經濟學を批判してゐるものであるから、それは單に經濟學的勞作であるのみでなく、そこにはまた辯證法的唯物論の認識論、唯物辯證法の諸法則、諸範疇、史的唯物論の基礎命題が具體化され、精密に、詳細に檢證されてゐるといふことが明白に觀取される。

一八七一年は普佛戰爭がプロシヤの勝利をもつて終りを告げ、それを契機としてドイツ諸國の統一がプロシヤのユンカー的モナルヒーの指導下に（それだけに極めて畸形的に）一應終結し、フランスにおいては五一年のクーデターによつて樹立されたナポレオン三世の帝國の倒壞（七〇年）後、一聯の軌礫を經て有名なパリ・コンミューンが、世界最初の勞働者政府が樹立され、そして沒落した年である。コンミューンは、勞働者のヒロイックな鬪爭にも拘らず、ナポレオン三世の治下で勞働者運動が制壓のために著しく弱められ、これがために事前に充分に力の集結がなされてゐなかつたことや、當時の經濟狀態（當時のフランスでは未だ手工業的生産が少なからぬ役割を演じた）の然らしむるところによつて、ブランキ主義者やプルードン主義者（プルードン主義者は「國際勞働者協會」の支部員であり、コンミューン評議會において少數派を成し、これに反し多數派はブランキ主義者であつた）の影響を脫しなかつたといふ事情のために慘ましい敗北に終つた。しかし乍ら「コンミューンはあらゆる誤謬にもかゝはらず十九世紀の最大のプロレタリア運動の・・・の・・・であつた」（レーニン）。マルクスはロンドンにおいて「國際勞働者協會」總務委員會の名をもつてコンミューンの活動を極力援助し、その經驗の詳細な吟味、批判（それはマルクスが書き、總務委員會の名で發行された文書「フランスにおける內亂」において叙述されてゐる）を通して、マルクス主義の中核ともいふべき、ブルジョア社會から次の社會への移行の、特に政治的の條件および形式に關する學說を一段と正確に、具體的に仕上げ、それによつてまた社會發展の一般法則を對象とする史的唯物論の內容を豐富ならしめた。周知の如く、レーニンはソヴエート國家の樹立に當つて、これに對する反對論者と論爭した場合、パリ・コンミューンの經驗とこの經驗の分析からのマルクスの結論とを再三援用した。

かくの如きが第一期におけるマルクス主義の發展の概要である。これで明かなやうに、第一期においては當時の歴史的條件に照應して、マルクス主義の諸方面のうち、勞働者運動の實踐に直接に關係する方面と、經濟學說とが特に展開されてゐる。

第二期

第二期（一八七二―一九〇四年）は、西ヨーロッパにおいてはブルジョア變革がすでに終了し、從つて第一期におけるやうな民族問題に絡む戰爭（即ちクリミヤ戰爭、イタリー統一をめぐるフランス、イタリーとオーストリーの戰爭、デンマークに對するプロシヤ、オーストリーの戰爭、普墺戰爭、普佛戰爭等）は勃發せず、他方ロシヤを初め東方諸國におけるブルジョア民主々義は未だ成熟しきらないといふやうな、比較的「平和的」な時代である。

パリ・コンミューンの慘敗の後をうけて「國際勞働者協會」は一八七二年をもつて壞滅し、七五年にはドイツ社會民主黨がアイゼナッハ派とラッサール派の合同によつて成立し、爾後、第二期においてはマルクス、エンゲルスに指導されたドイツ社會民主黨が國際勞働者運動の先頭に立つてゐた。大體この期間において各國に勞働者の組合や政黨が組織され、八九年には第二インタナショナルが成立した。それは、勞働者運動が比較的「平和的」に、廣汎に展開された時代であり、同時に資本主義の帝國主義的段階がこの期間の末期から始まつてゐる。マルクス、エンゲルスの死（一八八一年と一八九五年）もこの期間の出來事として擧げらるべきであらう。

すでに第一期末から國際勞働者運動において最も有力な理論となつてゐたマルクス主義は、第二期には全く支配的なものとなり、プルードン主義やバクーニン主義の影響の濃厚なラテン諸國においてすらマルクス主義が勞働者政黨

の綱領の基礎に置かれる迄になつた。だがそれまでになるには勿論、一聯の論爭が必要であつた。マルクスは七〇年代にもラッサール主義の批判を中止せず、七五年に創立されたドイツ社會民主黨の綱領におけるラッサール主義的要素に苛責なき批判を加へ（「ゴータ綱領批判」）、またエンゲルスはマルクスの協力を得て、七〇年代後半にドイツ社會民主黨内に擡頭したデューリングの小ブルジョア的社會主義を克服せねばならなかつた（「反デューリング論」）。所で、デューリングは哲學の領域においては形而上學的認識論を抱懷し、機械論的自然觀を固執し、社會觀においては唯物史觀に代へるに强力說（經濟でなく Gewalt 强力が社會發展の窮局的決定要因であるといふ學說）を以つてしたので、エンゲルスのデューリングに對する批判においては認識發展の辯證法や、自然辯證法や、史的唯物論の根本的な諸問題が明確に定式づけられ、具體的に展開されてゐる。大體、七〇年代後半から八〇年代の中期にかけて、エンゲルスはマルクス主義的世界觀の基礎的方面を完成させるために、就中、自然辯證法と史的唯物論の問題の研究に少なからぬ努力を費した（彼の草稿「自然辯證法」と著書「家族、私有財產および國家の起源」はこの時代のものである）。

エンゲルスの晩年は、主としてマルクス死後の國際勞働者運動の指導と、マルクスの「資本論」第二卷、第三卷の草稿の整理、發行のために費された。同時に、エンゲルスの晩年にはドイツの自由主義ブルジョアジーや小ブルジョアジーの間には新カント主義やマッハ主義の如き觀念論哲學が流行し始め、ブルジョアジーの側からマルクス主義社會觀の基礎たる史的唯物論に對する觀念論的批判が開始されてゐる。これらの事情は彼の晩年の著作「フォイエルバッハ論」や「空想より科學へ」の英語版への序文や、若干の手紙に反映し、それらの勞作において彼はカント的およびマッハ的＝新ヒューム主義的認識論に簡潔な、だが正確な批判を下し、史的唯物論の觀念論的批判が史的唯物論の

形而上學的曲解に基いてゐることを曝露してゐる。

しかし乍らマルクス、エンゲルスがマルクス主義者となつて以來の哲學的活動においては、主要な努力は形而上學的唯物論の弱點（後で說明するやうに、非辯證法的であり、社會觀において觀念論的であつたこと）の克服に向けられたといふことを見落してはならない。それは、當時においてはフォイエルバッハの唯物論や、ビュヒナー、フォークト、モレショット等の俗流唯物論やデューリングの機械論の如き形態の哲學が勞働者や進步的インテリゲンチャの間で非常に有力だつたからである。それで、マルクス、エンゲルスは正に辯證法的なる唯物論を强調し、史的唯物論を確立することに主要な努力を拂ひ、エンゲルスの「フォイエルバッハ論」にしても、その主要內容はフォイエルバッハの唯物論に對する批判に當てられてゐる。

然るに、エンゲルスの死後、事情は變つてきた。勞働者運動の順調な發展は、プロレタリア組織のなかに小ブルジョア的分子を多く引き入れ、これらの分子は勞働者階級に對するブルジョアジーの影響の導體となり、哲學においては觀念論の影響に屈服した。このことはエンゲルスの死後、ベルンシュタインはマルクス主義のあらゆる部分にわたるブルジョア的修正に從事し、その際、新カント主義に著しく依據した。以後、觀念論に對する批判がマルクス主義哲學の主要な任務として迫つてきた。そして一九〇五年から一九一七年に到る時代（ここに云ふ第三期）においてこの任務は一層痛切なものとなつた。

第三期

そこで、第三期についてその一般的特徵を述べるならば、世界史がすでに完全に帝國主義時代に入り、ロシヤを初めとする東方諸國においてブルジョア民主々義が成熟し、國際勞働者運動の中心がロシヤに

移つたといふ事實を指摘する必要がある。

一九〇四＝五年の日露戰爭におけるロシヤの敗北は世界的反動の支柱たるツアーリズムに多大の打擊を與へ、五年にはロシヤに最初のブルジョア革命が起り（それは失敗したが）、それは支那、トルコ、ペルシヤ、インド等の民衆に影響し、彼等を民主々義のための闘爭に奮起させた。

一九一四年には帝國主義的世界戰爭が勃發し、それは資本主義の一般的クリーゼの端緒となり、一七年一一月（當時のロシヤ曆では一〇月）ロシヤにソヴエート政權が樹立されると共に世界は二つの體制に分れ、クリーゼは決定的なものとなり、世界史は新しい時代に入つた。

この時代（一九〇五＝一七年）について最初に特記すべきは、ロシヤにおいて一九〇五年前後にブルジョア民主々義運動における勞働者階級の役割、態度に關する問題が中心問題となり、これに關するマルクス、エンゲルスの見解がレーニンによつて一層具體化され、それが一九〇五年の經驗によつて確證され、更にこの經驗の消化によつて益々正確に、精密に加工されたといふことである。メンシェヴィズムに對するレーニン主義、即ちボリシェヴィズムの相異はこの問題において決定的に明かとなつた。ボリシェヴィズムは初め一九〇三年のロシヤ社會民主黨大會において組織問題に關して明瞭にメンシェヴィズムに對立してあらはれたが、それは一八九四年以來のナロードニキやストルーヴェに對する闘爭を通して、理論的に準備されてきたのであり、一九〇五年をめぐるタクチックの問題において決定的に明確な形態をとつた。ナロードニキ（人民主義者）はロシヤの資本主義的發展の必然性を否認し、從つてロシヤの解放運動における勞働者階級（資本主義の產物）の役割を否定し、「批判的に思考する人物」の道德的理想に從つ

て社會改革は遂行さるべきであると主張した。ストルーヴェはこれに反し、ナロードニキの批判者として、ロシヤにおける資本主義の發展を主張したが、その際、資本主義の發展において、ロシヤの階級關係は如何なる形態をとり、種々の階級は如何なる役割を演じるかといふことを見落し、これがためにロシヤの資本主義的發展を勞働者階級の利害に結びつけて考察しなかつた。そこで、ナロードニキやストルーヴェに對するレーニンの批判は主に經濟理論、特にロシヤ經濟の分析をテーマとしてゐると共に、それはまたナロードニキの觀念論的社會觀やストルーヴェのカント主義的な抽象的客觀主義に對する批判をも含んでゐる。ところでこれに次いで組織問題および特にタクチックの問題のやうな具體的な問題が持ち出されると共に、ボリシェヴィズムはマルクス主義内の日和見主義的分派から明確に區別されてきたのである。

一九〇五＝六年の昂揚に續く一九〇七＝一〇年の反動時代には、ロシヤのマルクス主義者の間に清算派（支那でいふ取消派）や極左的偏向（召還派）が發生し、制壓と相俟つて陣營は著しく混亂し、思想的にはマッハ主義がこれに結びついて侵入した。そこでボグダーノフ、バザーロフ、ユシケーウイッチ、ルナチャルスキー等のマッハ主義を判し克服することが緊急の課題となつた。メンシェヴィキーの間でもプレハーノフとその門弟デボーリンおよびアクセリロードがこの課題にとりかかつた。しかしマッハ主義批判を最も徹底的にやつたのはレーニンである。彼はこれによつて辯證法的唯物論の認識論を發展させ、マルクス主義哲學を新しい段階に高めてゐる。

かやうにナロードニキやストルーヴェやマッハ主義者に對する闘爭の歴史が示してゐるやうに、彼の哲學的活動は主に觀念論との闘爭に向けられた。

だがまた機械論や形而上學的唯物論に對抗して辯證法を鋭く磨き上げることも、特に實踐的問題との聯關において極めて重要な課題となつた。レーニンは世界戰爭時代にヘーゲル論理學を研究してゐるが、それは決して實踐から離れた書齋的な仕事ではなかつた。一八七二年以來の相對的に「平和的」な時代に慣らされて次第に日和見主義的となり、世界戰爭の勃發に當つてマルクス主義的態度をとり得ず、見事にその破綻を示した西ヨーロッパのマルクス主義者や、プロレタリア的たらんと努めつつもその非辯證法的な方法に禍されて幾多の誤謬を犯したローザ・ルクセムブルグや、一七年の「十月」に對するメンシェヴィキー的批判者やに對する論爭、およびそれに關聯せる帝國主義の分析、資本主義から新社會への移行過程の分析等の具體的、實踐的課題との結びつきにおいて、辯證法は輝かしく適用され、豐富な內容を與へられた。

このやうにしてレーニンは彼の時代の社會的歷史的條件に應じて、マルクス主義をそのあらゆる部分において前進させており、特に哲學的方面についていへば、觀念論との闘爭において辯證法的唯物論の認識論を發展させ（といふのは、思惟と存在の關係の問題において觀念論と唯物論は分れるが、この問題は認識論の問題だからである）、日和見主義との闘爭において哲學を實踐に結びつけ、社會發展の辯證法を究明した。

現在

これが、マルクス主義の發展の第三期における特徴であり、第四期、即ち一九一七年十月以後においても資本主義諸國においてはファッシズムの擡頭による觀念論的反動哲學の流行や、社會民主々義の社會ファッシズムへの轉化と關聯せるマルクス主義の修正の强化は、第三の時代の後期におけると同じ哲學的課題を一層鋭い形態で提起してゐる。

第三の時代におけるマッハ主義や新カント主義の流行の後を受けて、第四期、即ち現在においては國際社會民主々義はマックス・アドラーやオットー・バウワーの如きマルクス主義のカント主義的歪曲者を指導者に戴き、純然たる新カント主義者フォレンダーの一派をその隊列内に持ち、最近においてはブルジョア哲學における新ヘーゲル主義の流行の影響の下にジーグフリード・マルクの如きヘーゲル主義者が現はれ、ヘーゲル的な觀念論的辯證法への轉向の傾向が著しい。加ふるに、徹底的に反動化したブルジョア哲學においては現在新ヘーゲル主義と竝んで種々の型の直觀主義的および主觀主義的（人間學的、生哲學的等）な神祕的、反科學的觀念論が勃興し、勤勞人民の蒙昧化の役割を演じており、社會民主々義の間においては唯物史觀の自然主義的修正の傾向も顯著である（例へばカウツキー）。

わが國においてはブルジョア哲學者の間では新ヘーゲル主義や生哲學が流行し、多分に封建的色彩を帶びたファッショ理論家は一口に日本主義と呼ばれる非科學的、宗教的な觀念論を信奉し、その熱烈な宣傳に從事してゐる。他方社會民主々義者にとつては機械論的世界觀が特徴的であり、それは例へば大森義太郎氏の哲學において典型的にあらはれてゐる。

このやうな條件の故に、現在の資本主義諸國においては、從つてわが國においても、一般哲學的方面では、ますます露骨に反動的色彩をあらはしつつある觀念論の批判が主要課題であり、またそれに附隨して機械的唯物論の克服が必要とされ、特に歴史の領域では機械論および幾分は觀念論からも歸結される客觀主義が主要危險性である。同時に自然科學への觀念論の著しい影響による混亂は、自然辯證法の研鑽の任務をも提起する。

現在マルクス主義の發展の先頭に見出されるソヴェート聯邦においては、一般哲學的方面でも、主要危險性は機械

論であり、同時に唯物辯證法の觀念論的修正に對する闘爭の課題も提起されてゐる。これらの偏向は特にレーニンの死（一九二四年）後、一段と顯著になり、一時はトロツキー主義およびトロツキー＝ジノヴィエフのブロックと少なからぬ關係があるデボーリン一派のメンシェヴィズム化しつつある觀念論が辯證法的唯物論の假面をつけて廣く普及され、支配的な地位を占めてゐた。またデボーリン派と對立關係にあつた機械論者はいはゆる均衡論を通してブハーリン等の右翼的偏向の理論的基礎となり、これがために現在、主要危險性となつてゐるのである。この二つの偏向に對する闘爭を通してソヴエート社會の・・・の辯證法を闡明することが現在ソヴエート聯邦におけるマルクス主義哲學の課題であり、更に經濟建設の發展の契機たる技術と自然科學の發展のために、自然科學の唯物辯證法的改造の課題も少なからず重要である。このやうにしてソヴエート聯邦において展開される理論は、資本主義諸國の勞働者階級に對する大きな思想的示唆として役立つものである。

以上によつて、マルクス主義哲學の發展が如何に、時代の歴史的條件によつて制約されるか、從つてその正しい發展のためには勞働者的見地から各々の時代の諸條件に意識的に結びつくことが如何に重要であるか、といふことが一應明白になつたと思ふ。

第三章　唯物論と觀念論

第一節　哲學における二つの方向

——唯物論と觀念論——

人間はその生活々動において外界を認識し、この認識を指針として彼の行爲、活動は方向付けられる。

哲學の根本問題

このやうに人間の生活々動との交互關係において外界——自然と社會——に關する認識、科學は發生、發展する。ところで、外界に關する認識が或る程度まで發展すると、必然的にこの外界と、外界を認識する人間の意識との關係が理論的問題として提起されてくる。そしてこの問題、即ち存在と思惟、自然と精神、客觀と主觀の關係の問題が、とりも直さず哲學の根本問題である。

エンゲルスが云ったやうに、この問題は二つの側面を有してゐる。第一は、存在と思惟、自然と精神の何れが根源的であるか、云ひかへれば、その何れが先きに成立するものであるか、といふ問題であり、第二は、人間の意識、思惟は存在をそのあるがままに認識し得るかどうか、即ち簡單にいへば思惟と存在は一致し得るかどうか、といふ問題である。

さて、この第一の問題に對する解答の如何によつて唯物論と觀念論の區別が發生する。存在が、物質的なものが根

源的であり、思惟は派生的なものであると主張するのは唯物論であり、これに反し精神的なものが、思惟が根本的なものであつて、物質的なもの、客觀的存在は第二次的であると見做すのは觀念論である。唯物論にも、觀念論にも、種々の學派があり、個々の問題について色々異つた學說があるけれども、一切の唯物論學說は思惟に對して存在を根本的と見る點においては一致しており、また存在に對して思惟を、精神的なものを根源的と考へることは一切の種類の觀念論哲學の共通點である。

それで、世界觀の基礎においては觀念論は宗教と同一であることが分る。宗教といつても、多種多樣であるが、すべての宗教は、人間の目に見えない、超自然的、精神的な力の存在を假定し、それを物質的なものに對する原因、支配者等と見做し、そういふ力の御蔭をもつて人間は現實生活における障害から救はれ得る、と信じることにおいて共通である。從つて宗教は物質的なものに對して精神的なものを根本と見做す點において觀念論と一致するのである。例へばキリスト教においては世界の一切のものは神の被造物であり、佛教の僧侶によれば客觀世界は結局においては「心界」の內容である。觀念論はこのやうな宗教的世界觀に理論的支持を與へるものであり、觀念論哲學者は僧侶主義の學問的召使である。

これに反し、科學の立場は本來上、唯物論的である。例へば自然科學者は一切の自然過程を物質の運動形態として理解し、それらの過程の說明に當つて神を必要ともしないし、また自然現象を心の中の現象として把握するのでもない。勿論、自然科學者は屢々敬神家であり觀念論者である。だがそれは彼等が宗教や觀念論哲學の側から影響された結果であつて、自然に對する科學的研究の結果ではない。却つて自然の科學的研究はさういふ宗教的乃至は觀念論的

世界觀のために邪道に導かれ、混亂するのみである。で、一般に科學者が自然や歴史を眞面目に研究するときには、彼等はその研究對象が彼等の意識や神から獨立に客觀的に存在するもの又は存在したものであるといふ唯物論的立場に立つてゐるし、また立たなければならない。それは丁度、普通の人間がたとえ空想の中では神や佛の存在を認めても、現實生活の各々の活動に際しては吾々の主觀から獨立な外界の存在を信じて疑はないのと同樣である。外界の存在に關する吾々の確信は、一切の經驗、實踐によつて確證されてゐる。そこで吾々は常識的な立場においては、科學者と同樣に、常に唯物論の見地に立つてゐるわけである。このやうに存在と思惟、客觀と主觀の關係について特に理論的に反省することなく、謂はば本能的、無意識的に吾々から獨立な外界の存在を確信してゐる立場は、自生的（又は自然生的）唯物論とか、素朴實在論と呼ばれる。科學と健全な常識との、この立場を、存在と思惟の關係の問題の提起に基いて、宗教や觀念論に對抗して擁護し、理論的に基礎づけるのが、とりも直さず哲學的唯物論である。

哲學の全歴史は實に唯物論と觀念論の鬪爭の歴史である。どんな名稱、どんなレッテルを着けて現はれる哲學上の學說でも、これをよく吟味すれば唯物論と觀念論の二大方向の何れかに屬するものであることが判然する。或る種の哲學者は、往々、精神的なものと物質的なものの中間狀態、又は精神的にして同時に物質的な「要素」、又は精神的なものと物質的なものの「直接的統一」の狀態を假想し、それによつて唯物論と觀念論の對立を「止揚」し、兩者を「綜合」する、より高次の哲學を建設しようと企てる。しかしこれは折衷主義であつて、この種の學說においては必ず唯物論的要素か觀念論的要素の何れかが優勢であり、從つて折衷主義的學說は結局、唯物論か觀念論のいづれかの方に片付けられるものである。

思惟と存在の關係の問題における第二の側面、即ち思惟と存在の合致に關する問題は、徹底した唯物論の見地からは、思惟は存在の反映であるといふ意味で肯定的に解決され、また徹底した觀念論の見地からは、存在は思惟の所産であるといふ意味で肯定的に解決される。これらの徹底した一元論的な見地と異つて、思惟は存在に合致しないと主張する見解は不可知論（又は懷疑論）と呼ばれる。不可知論は折衷主義哲學の一種であり、存在と思惟を一元論的に統一において把握しないで、兩者を切離すところの二元論的な、不徹底な學說であつて、所詮、理論的に成り立たない。何故なら、吾々の思惟が存在の眞理に合致し得ず、如何なる條件の下でも、それを如實に捉へ得ないとするならば、科學や哲學に從事することも無駄だといふ結論が出てくるからである。

要するに、哲學の根本問題たる存在と思惟、自然と精神の關係の問題については、基本的にはただ唯物論と觀念論の二つの相對立する學說のみが可能である。

觀念論の成立條件とその役割

今度は、觀念論の一般的性質を明かにしよう。

ドイツの觀念論者フィヒテは、「ひとが如何なる哲學を持つかは、彼が如何なる人であるかに依存する」と云つた。だが、哲學において觀念論と唯物論の區別が生れるのは、決して單に哲學者の個人的趣味や人柄によるのではない。唯物論の反對者が屢々、物慾の強い人間や無道德者は唯物論を信奉し、これに反し高潔なる精神の持ち主は觀念論者となる、といつた風に說明するのは甚だしい誤謬である。唯物論と觀念論といふ互ひに對立する學說の發生、形成には社會的、歷史的根據がある。先づこれを觀念論について見るならば、知的勞働と筋肉勞働、又は云ひかへれば、物質的勞働と精神的勞働の分離、階級的差別の發生が哲學的觀念論の成立の社會的根據である。

社會の生産力が或る程度まで發達して、各人が自分の生活の維持に必要なより以上のものを生産し得なかつたやうな時代が終りを告げると共に、知的勞働と筋肉勞働の間の分業の基礎が造り出され、前者は後者から分離する。ところで知的勞働を專問とする者が、知的勞働の手段たる思惟、精神を偶像化し、それを空想的に誇大し、絶對化する傾向に陷り易いことは自然の勢である。加ふるに、第一に、原始社會や古代社會においては僧侶が知的勞働の擔當者として優越な地位を占めてゐるのだから、思惟、精神といふが如きものを絶對化するための基礎はすでに宗教によつて與へられてゐる。第二に、知的勞働と筋肉勞働の分業は物質的勞働自身の內部の分業から派生し、階級的差別を地盤とするが、知的勞働の擔當者は多くは治者階級の所屬員である。その際、宗教は、現存社會秩序を神とか天とか因緣とかいふものによつて設定されたものとして神聖化し、それへの盲從を敎へるものであつて、その本質上、治者階級の御用をつとめるものである。從つて宗敎の兄弟分であるところの觀念論は治者階級の利益に合致する。かういふ事情の故に、觀念論は階級的差別に立脚する社會においては大體において治者階級の哲學として形成される。

他面においては、思惟が絶對化されて觀念論が生じるとき、かやうな絶對化のための根據は人間の認識過程のうちに與へられてゐなければならない。如何なる學說といへども社會的、歷史的に規定されてゐることは勿論である。けれども、同時にそれは認識としては直接的には認識過程のうちにその成立根據を持つてゐることも當然である。そこで、觀念論には單に社會的根據ばかりでなく、また認識論的根據もあることが分る。

外界の物や現象に關する吾々の認識は如何にして成立するか？　先づ第一に外界と吾々の意識とが認識の成立の前提である。次にこの兩者の接觸——それは實踐によつて媒介される——によつて吾々のうちに感覺が生じ、それから

思惟の力によつて概念が形成される。そこで、認識過程におけるこれらの契機のうち、感覺、思惟、概念の如き主觀的契機を外界の對象から切離して考へるならば、それらの契機は獨立的な存在を有するものの如くに見做され、遂には外界の存在は否定されるか、又は二次的なものとされるやうになる。つまり、認識過程の諸契機を具體的統一において觀察しないで、その一つを空想的に誇大し、絶對化することによつて觀念論の發生の認識論的根據がある。吾々の認識過程そのもののうちに含まれてゐる觀念論の、このやうな可能性は、一定の歴史的段階において、先きに述べたやうな社會的根據と結びついて現實性へと持ち來たされるのである。

ヨーロッパにおいては、觀念論は古代ギリシヤの奴隷制社會の頽廢期に著しく發展し、ローマの奴隷所有者的國家の沒落期には一層、宗教的、神秘主義的色彩を帶びて現はれ、當時發生したキリスト教と結合し、それに從屬し、その後、千年に亘る封建的中世において宗教の召使として完全に治者階級に奉仕した。近代においても觀念論は反動的階級の世界觀であつた。もつとも、ドイツ古典哲學における如く、新興ブルジョア階級が、その無力さや封建的支配階級に對する依存の故に、自己の進步的要求を觀念論の衣で蔽つてゐたといふ場合もあつた。現代（帝國主義時代）、特に最近においては、觀念論は徹頭徹尾反動的であり、ブルジョア的反動やファッシズムや社會ファッシズムの理論となつてゐる。

東洋においては西洋文化の侵入以前には哲學は獨立の學問として存在せず、個々の哲學的問題は宗教のなかに包含されてゐた。わが國で哲學といふ言葉が初めて用ひられたのは西周の「百一新論」（明治七年）においてである。明治以前の日本においては、哲學の諸問題は宗教の雲霧のなかに包まれており、儒教においては比較的明確に取扱はれは

したが、それも極めて低い理論的水準に立つものでしかなかつた。そして佛教、神道、儒教の如き宗教の召使として
は當時の哲學的思想は觀念論的たらざるを得なかつた。現代日本においては觀念論はファッシズムおよびファッショ
化しつつあるブルジョアジーの世界觀であり、「思想善導」を目的として宗教と共同戰線を張つて唯物論的世界觀と
鬪つてゐる。觀念論の非科學的な、同時に反動的な本質は、現在、資本主義諸國において、誰の目にも明かなまでに
著しくむき出しにされてゐる。これは實に唯物論を信條とするプロレタリアートの擡頭、積極化、從つて階級關係の
緊張のイデオロギー的反映なのである。

唯物論の科學性と進歩性

觀念論と反對に、唯物論は宗教に對して對立的な、即ち、科學的なものであり、また同時に進歩的
である。それは觀念論の如く認識の主觀的契機の一面的擴大、主觀主義に立脚しないで、自然に關
する人間の認識は人間の主觀から獨立に存在する自然の、人間の意識内への反映であるといふ、あらゆる自然研究、
あらゆる經驗、あらゆる實踐によつて是認される見解を固執する。從つて唯物論は超自然な精神や力の存在に關する
宗教的觀念と相容れない哲學であり、自然現象、物質の運動の原因を自然そのもの、物質そのものの、のうちに見出すこ
とを要求する科學的見解である。

このやうな本質上、無神論的な、科學的な哲學であるところの唯物論が、現存秩序の神聖化を任務とする宗教の擁
護に利益を持つが如き反動的階級の世界觀でありえないことは明かである。古代ギリシヤの唯物論的なイオニヤ派の
自然哲學や、その一層の展開としてのロイキッポスやデモクリトスの原子論的唯物論は、手工業的技術や航海術の發
展、それに基く奴隷制經濟の發展、商業の繁榮等を一般的背景とする、上向的發展期におけるギリシヤの奴隷所有者

階級の哲學であつた。奴隷所有者階級といへども、舊社會（原始共産制）の崩壞を通して生産力の一層の發展を齎らした限りでは進歩的だつたのである。古代ギリシャにおいて唯物論に對して觀念論が優勢になつたのは、奴隷制經濟が行詰まり、從つて奴隷所有者階級がもはや生産力の上向的發展の擔當者たることを止め、却つてその發展の阻止、停滯、生産力の破壞の要素に轉化したことによつて制約されてゐた。

唯物論の進歩的役割は近代においては極めて明瞭である。十八世紀のフランス唯物論は封建貴族およびその召使たる僧侶團に對するブルジョアジーの鬪爭の旗印しであつた。それは封建制の打倒、ブルジョア的秩序の樹立のための鬪爭の哲學として役立つた。十七＝八世紀におけるイギリスの唯物論も、十九世紀におけるフォイエルバッハやドイツ俗流唯物論も、いづれも、封建制を解體に導き、新しいブルジョア的秩序の創造を促した資本主義的生産力の目醒ましい發展の地盤の上に成長し、舊來の宗教的、觀念論的世界觀の對立物として、一應、進歩的な役割を演じた。

日本においても、ブルジョアジーが今日の如く反動化せず、自由民權の名において半封建的な官僚政府の反對派として振舞つた明治初年には、ヨーロッパの自然科學思想、特に進化論やエネルギー説の移入と相俟つて、唯物論的傾向が顯著であり、福澤諭吉や中江篤介（兆民）の如き唯物論者が輩出した。福澤はブルジョア的啓蒙家として封建的な儒教的、佛教的世界觀の打破において大きな役割を演じ、中江は「無神無靈魂」を標榜して徹底的な唯物論、無神論の見地を宣傳した。しかし乍ら他方では、官僚政府は封建制への復歸によつてでなく、わが國の資本主義的發展の助成によつて、即ち結局においてはブルジョアジーとの融合によつてのみ自己の存立を完うしえたのだから、その代辯者もまた生産力の發展の契機として役立つ自然科學や自然科學的世界觀、從つて唯物論を或る程度まで採り入れた。

加藤弘之の哲學はその代表的な例である。

だが、ブルジョアジーの進歩性には制限があり、彼等は封建的收取を撤廢してもそれに代へるに直ちに資本主義的收取を以つてするのであつて、決して收取一般を止揚せず、その限り人類の解放を成就しない。かういふ事情に關聯して、ブルジョア唯物論の進歩性も制限されており、後で見るやうに、その科學的性質にも種々の制限がある。しかしさういふ唯物論すら今やブルジョアジーによつて完全に忘れられ、放棄され、唾棄されてゐる。帝國主義時代に入ると共に、觀念論的反動がブルジョア哲學において支配的となり、特に最近においてはそれはますゝ宗教的、非科學的、神秘主義的色彩を濃厚ならしめてゐる。

最も徹底的な唯物論としての辯證法的唯物論

徹底的に進歩的であり、科學的に首尾一貫して、觀念論や宗教に對して毫末の妥協も示さないのは、ただ辯證法的唯物論のみである。辯證法的唯物論はプロレタリアートの成長に伴つて、その哲學として十九世紀四十年代に發生し、その後の世界史における幾多の試練を經てますゝ強固化し、內容豊富となりつつ今日に至つてゐる。それはプロレタリアートの哲學として、ブルジョア哲學における合理的なもの、價値あるものを攝取し、そういふ要素をより高い立場において發展せしめる。しかしこのことは同時に、ブルジョア哲學の非科學的、反動的方面に對する容赦なき批判を通してのみ可能である。

辯證法的唯物論の創始者たるマルクスとエンゲルスは初め、觀念論哲學および特にドイツ古典哲學の最後の結論を成すところのヘーゲルの辯證法的觀念論の信奉者であつた。だが、マルクスは大學卒業の翌年（一八四二年）「ライン新聞」において政論家として進出し、社會問題を論じるに當つて經濟學や社會主義學說の研究の必要を悟り、「ラ

イン新聞」の閉鎖（一八四三年三月）後、近代ブルジョア諸國の歴史の研究に着手し、一八四三年秋、パリに亡命すると共に經濟學の研究を始め、同時にまたフランスの社會主義者達と交はり、彼等の學説に親炙した。

マルクスは「ライン新聞」時代にすでに、一八四一年に「キリスト教の本質」において公然と唯物論、無神論の旗をひるがへしたフォイエルバッハの影響をうけて唯物論者となつてゐる。しかし乍らフォイエルバッハの唯物論はシュトラウスの「ヤソ傳」（一八三五年）以來、左翼ヘーゲル學派（マルクスもエンゲルスもこの學派に屬してゐた）によつて行はれたブルジョア的なキリスト教批判の最後の到達點であつて、その本質においては十七＝八世紀の唯物論と同じく形而上學的唯物論であつた。だからヘーゲルにおける辯證法を價値あるものと認めたマルクスは、フォイエルバッハに滿足しなかつた。マルクスは唯物論に轉向すると同時に、一方ではヘーゲル觀念論の信奉者（バウワー兄弟の如き）と闘ひ、他方ではフォイエルバッハ的唯物論の弱點を克服することによつて辯證法的唯物論を創造し始めてゐる。すべてこのことは政治問題、社會問題の具體的研究を通して行はれたのであつた。そしてこれらの具體的研究の結果、マルクスは一八四三年には（「ヘーゲル法律哲學批判序説」）プロレタリアートの世界史的役割に關する觀念に到達し、爾後この觀念はマルクスの全學説の中核をなしてゐる。從つて辯證法的唯物論はプロレタリアートの哲學として形成された。

エンゲルスもマルクスと同じく左翼ヘーゲル主義からフォイエルバッハを通して唯物論に進み、政治的、社會的の諸問題の研究を通して、且つマルクスとの共働の下に、辯證法的唯物論に到達した。一八四四年に書かれたマルクスとエンゲルスの共著「神聖家族」においてはフォイエルバッハ的用語の下にではあるが大體において辯證法的唯物論

の見地からヘーゲル辯證法の亞流バウワー一派に對する批判がなされ、四五＝六年に書かれた共著「ドイツ・イデオロギー」（ここではフォイエルバッハやバウワーやドイツの空想的社會主義が決定的に批判されてゐる）においては辯證法的唯物論の基礎は全く確立されてゐる。

辯證法的唯物論のこのやうな發生過程を一見しても分るやうに、この哲學は、第一に、プロレタリアートの利益に奉仕すること、第二に、具體的な科學的研究に結びついてゐること（このことはそれが最も科學的な哲學であるといふ事實の證據である）、第三に、觀念論およびブルジョア唯物論に對する批判、鬪爭（二つの戰線上の鬪爭）なしには自らを貫徹し得ないこと、をもつて主要な特徴とするものである。從つて辯證法的唯物論の發展の條件は、プロレタリアートの實踐の見地から、過去の經驗の概括に基いて、當面の諸問題の究明との聯關において、觀念論およびプルジョア唯物論と鬪つてゆくことである。

マルクスとエンゲルスが辯證法的唯物論を確立して以來、彼等の哲學的關心の主要方向は、當時流行してゐたブルジョア唯物論に對抗して唯物辯證法と唯物史觀（ブルジョア唯物論の主要缺點は非辯證法的であり、歷史の領域において觀念論的であることである）を展開することであつた。俗流唯物論に對する彼等の非難およびデューリングの機械的唯物論に對するエンゲルスの批判はこの方向のものである。だがそれと共にマルクスは、プルードン（「哲學の貧困」―一八四七年―において）やラッサールの觀念論的辯證法を批判し、またエンゲルスは彼の晩年に復活し始めたカント主義およびヒューム主義を批判せずには置かなかつた。そしてこれらすべての哲學的活動は、それ〴〵、プロレタリアートの當面の必要と、自然並びに歷史の具體的研究とに結びついてゐたのである。

レーニンはエンゲルスの死後の、帝國主義の時代に、この時代の新しい諸條件に適應せしめて辯證法的唯物論を一層發展させた。この時代にはブルジョア哲學において觀念論が優位を占め、それに關聯して觀念論的見解はプロレタリアートの間にも浸透し始めた。從つてレーニンの哲學的活動の主要方向は觀念論との鬪爭であつた。第二章で述べたやうに、ミハイロフスキーの主觀的社會學、ストールヴェの新カント主義、ボグダーノフ一派の經驗批判論に對する鬪爭がそれである。同時に彼はこの鬪爭をより有力に行ひえんがために、また唯物史觀をその自然主義的、機械論的歪曲から防衛せんがために、唯物辯證法、特に史的辯證法を强調し、展開したのであつた。これらの活動が世界および特にロシヤのプロレタリアートのその時々の重要問題と結びついてゐたこと、およびそれがマルクス、エンゲルス以後の自然科學の達成やプロレタリアートの經驗の吟味と緊密に結びついてゐたことは勿論である。

このやうに、辯證法的唯物論は、――歴史的條件の變化に應じて何を批判の主要對象とするかは變はるけれども――一つねにただ二つの戰線上の鬪爭を通してのみ强化し、發展する。

ソヴェート聯邦においては宗教や觀念論の存立のための社會的根據が清掃されつつあるのと關聯して、唯物論、しかも正に辯證法的唯物論が壓倒的である。そこでは從つてブルジョア的世界觀は辯證法的唯物論に僞裝して機械的唯物論や、唯物辯證法の觀念論的修正の姿をとつてこつそり侵入し、その際、機械的唯物論は政治上において現段階の主要危險性であるところの右翼的偏向の理論として役立つてゐるために、また哲學上における主要危險性である。

資本主義諸國では、これと異つて、辯證法的唯物論を脅かす最大のものは、ます〳〵反動化し、非科學化しつつある觀念論である。だが歴史の方面では、機械的唯物論や或る種の觀念論と結びついてゐる客觀主義に對する無慈悲な

批判が當面の主要課題でなければならない。この二つの潮流に對する批判を、積極性ある主題の具體的解明に結びつけて遂行することが、辯證法的唯物論の發展、具體化の唯一の確實な保證である。

第二節　觀念論の主要形態

主觀的觀念論

近代における哲學的反動は最初、先づ主觀的觀念論の姿をとつて現はれた。その典型的な代表者はイギリスの僧侶ジョージ・バークレーである。バークレーはブルジョアジーがすでに支配階級の一員として公認されてゐた十八世紀のイギリスにおける反動貴族のイデオローグであり、彼の努力は唯物論、無神論に對抗して宗教を擁護することであつた。ところで唯物論は「物質的實體」の客觀的實在性の主張から出發するのだから、唯物論を打破し、その無神論的世界觀を絶滅するためには、何よりも先づ「物質的實體」なるものが客觀的に存在せぬことを論證しなければならない、とバークレーは考へる。

バークレーによれば、吾々の感覺において吾々に對して與へられてゐるものは外界の存在、有形的實體、物質的な物ではなくて實は單なる觀念である。物質的な物とは一定の感覺の集合に對して吾々が與へた名稱以外のものではなく、感覺とは知覺された觀念に外ならないから、物質的な物は實は吾々の心、精神のうちにのみ存在するものであつて、認識する主觀、精神から獨立な實在としての物質なるものはあり得ない。例へば林檎といふ物質的な物が客觀的に存在するが故に吾々がそれについて一定の色、味、匂、形、固さ等の感覺を與へられるのでなく、これらの感覺が

先きに存在してゐて、それらは互ひに結びついてゐるやうに見えるので、その集合から林檎といふ「物」が構想されるのである。で、さういふ「物」は吾々の心から獨立でなく、却つて心の産物である。

現代においてはバークレー流の主觀的觀念論はいはゆるマッハ主義の姿をとつて現はれてゐる。マッハは唯物論と觀念論の對立を撤廢しようと努め、精神的でも物質的でもないと云ふところの「世界要素」なるものを發見し、一切の存在物はこの「要素」の集合に外ならないと斷定する。しからば、その「要素」とは一體何であるか？　外でもないそれは感覺なのである。マッハ自身「要素は普通には感覺と呼ばれる。この名稱はすでに一定の一面的な理論（觀念論――筆者）を考へさせるが故に、吾々は簡單に要素と云ふことにする」と云つてゐる。だが感覺を「要素」といひ變へたところで事態の本質に變はりはない。マッハの立場は、存在するものはただ、吾々の（嚴密には私の）感覺のみであるといふ主觀的觀念論である。この立場は、自然法則、因果性の如きものは吾々から獨立に存在するのでなく、それは吾々が感覺の多樣を整理し、簡單化して把握するために便宜的に想定する主觀的なものでしかない。

因果性に關するこの主張は不可知論者ヒュームの主張と同一である。ヒュームは因果性は吾々の感覺、經驗から發生する主觀的な規定であつて、客觀的妥當性を有しないと考へた。それで、マッハ主義は客觀的眞理を認めず、一切の認識において相對的眞理しか認めない點で、不可知論的であり、それ故にまた新ヒューム主義とも呼ばれてゐる。

アヴェナリウスの經驗批判論も、「自我と環境との不可分的同格」の原理によつて唯物論と觀念論の一面性を克服しようとして生れた學說であるが、これも主觀から獨立な客觀の存在を認めず、「感覺のみが在るものとして考へられ得る」といふ主張においてマッハ主義と同一の主觀的觀念論である。

マッハ主義に對する闘爭は辯證法的唯物論の發展史において極めて重要な頁を成してゐる。マッハ主義はロシヤにおいて一九〇七＝一〇年の反動時代に勞働者運動の内部における種々の日和見主義的潮流（清算派や召還派）の哲學として、勞働者階級を思想的に混亂させる役割を演じた。レーニンの名著「唯物論と經驗批判論」はかういふ事情の下でボグダーノフ一派のマッハ主義に對抗して辯證法的唯物論を擁護したものである。その際、レーニンは、他のマッハ主義批判者、例へばプレハーノフと異つて、マッハ主義に理論的根據を與へた當時の理論自然科學、就中、物理學の狀態を分析し、かかる分析に基いて辯證法的唯物論をエンゲルス以後の科學の成果に結びつけて一層具體化し、新しい段階へ發展させた。レーニンによれば、マッハ主義は社會的には小ブルジョアジーの反動哲學であり、理論的には十九世紀末から二十世紀初頭にかけての自然科學の危機に根ざせる一學說である。この時代の物理學は、舊い理論と新しい理論の頻繁な交替、電子論による物質の電氣的性質の解明等をもつて特色とした。そこで、一部の自然科學者は、吾々の理論は何らかの程度に客觀的眞理の反映であり、種々の理論の交替は自然の客觀的法則の認識の深化の過程であるといふ辯證法的唯物論の認識論を理解してゐなかつたために、自然科學上の理論は科學者によつて構成される「作業假說」にすぎず、單なる相對的眞理しか持ち得ないとか、また物質が電磁氣的なものであるとすれば、從來の意味の「物質は消滅した」のであつて、唯物論は破綻したのだ、とかいふ結論に到達した。物理學上のかやうな觀念論的潮流を背景として、マッハ主義は流行したのであつた。レーニンはこれに反して、舊來の物質觀における物質の窮局要素たる原子の電子への崩壞は物質の消滅でなくて物質に對する人間の認識の一層の深化を意味するものであり、總じて科學上の理論は客觀的眞理を大なり小なりの程度に反映しており、從つて諸々の理論の交替は單に相

對的眞理でしかない種々の「作業假說」の交替でなくして、客觀的眞理への人間の認識の接近の表現であるといふこと、換言すれば自然科學の發展は、まづ〳〵辯證法的唯物論の認識論の正しさを確證するものであるといふことを明かにした。

然るに、現在においても、ブルジョア自然科學者の間には、彼等が辯證法的唯物論を理解しないか、又は憎惡してゐるために、マッハ主義的見解が可成り强固に存續してゐる。このことは、特殊的には、原子內過程を研究するミクロ物理學（原子物理學）においては觀測手段（光）と對象（電子）との間に交互作用が起るとか、過程の合法則性が機械的因果性の觀點から把握されないといふ事實から、多くのブルジョア物理學者によつて主觀主義的、不可知論的認識論や「非決定論」が結論されてゐるといふ理由にも基いてゐるが、もつと一般的には、マッハ主義が感覺をもつて認識の窮局の源泉としてゐることがその理由である。マッハ主義者は云ふ。吾々の認識の出發點は感覺であり、一切の科學的認識は多樣な感覺的所與を整頓し、齊一化することにおいて成立する、で、その場合、感覺の原因として外界の物の刺戟を想定するが如きは獨斷論である、普通に吾々が外界の實在と見做してゐるものも、一度び哲學的反省を加へるならば實は吾々の感覺內容に外ならないことが判明する、と。かやうなマッハ主義的論法は、吾々の感覺において吾々に與へられるところの自然をば、勞働者の如く直接的生產過程において實踐的に働きかける對象として取扱はないで、專ら科學的研究のための理論的課題として取扱ふブルジョア專門科學者にとつては、一應尤もらしく聞えるのである。

しかし乍らこの一應尤もらしい議論を徹底させるならば、結局、世界には「自我」（私）とその感覺しか存在しない

といふ結論になる。私が現在知覺してゐないものは存在しないものであり、他人も同樣に、私が彼を知覺してゐる間は私の感覺內容であり、私が知覺してゐないときは彼は存在しない、といふ結論になる。これは唯我論と呼ばれる見解であつて、その荒唐無稽なることは一見して明かである。バークレーはこのやうな唯我論的歸結を避けるために神や神の被造物たる多くの「有限なる精神」の存在を認め、「私」が知覺してゐない對象でも他の「有限なる精神」が知覺しておれば存在するものであり、また一切の存在物は常に神によつて知覺されてゐるが故に存在するのだと主張する。「すべての客觀は永久に神によつて知られてゐる、又は同じ事であるが、神の心の中に永久の存在を有する。だが、以前には被造物にとつて知覺出來なかつた物が、神の命令によつて彼等に知覺されるときには、それらのものは創造された心に對して相對的存在を始めたと云はれる」（「ヒラスとフィロノウスの三つの對話」）。これがバークレーの見解であり、彼はかやうな立場から舊約聖書の天地開闢物語を大眞面目に說明してゐる。だが「私」に知覺されない神の存在を假定したり、他人、又は「私」以外の「有限なる精神」が「私」の感覺から獨立に存在すると見做したりするのは、ただ感覺のみが存在するといふ主觀的觀念論の基本的原理と矛盾することは明白である。主觀的觀念論は徹底的な場合には唯我論を避け得ない。

十九世紀末から廿世紀初頭にかけて勃興し、現今において現象學派や新ヘーゲル主義と大なり小なり融合してゐる生哲學（特にディルタイのそれでなく、一般に直觀主義や情意主義を指した廣い意味の生の哲學）も、大體において主觀的觀念論の色彩の濃厚なものである。何故なら生哲學に云ふ生は、ただ主觀の直觀、體驗、純粹經驗にのみ內在するものであつて、主觀から獨立な實在ではないからである。フランスの反動哲學者ベルグソンはこの潮流の典型的

代表者であり、ドイツではフッサールの現象學が主知主義的な直觀主義（論理的なものの直觀的把握、即ち「本質直觀」の如き）に基いており、フッサールから出たハイデッガーの存在論には情意主義の要素が多分にある。彼は人間の「不安」の感情の上に、全形而上學を打ち立てようと企てる。すべてこれらは、帝國主義時代および特に一般的クリーゼの時代におけるブルジョア哲學の神秘化、墮落（論理的思惟の無力化といふ意味の）の表現である。

カントの二元論

現代における反動哲學の源泉として少なからぬ重要な地位を占めてゐるのはカント哲學である。カント主義（いはゆる批判哲學、批判主義）は十八世紀七十年に始まるのであつて、それはドイツにおける啓蒙の所産である。いはゆる啓蒙は在來の封建的、神學的世界觀に對する新興ブルジョアジーの闘爭の哲學として、十七世紀後半以來準備され、ロックの理神論の姿をとつて現はれ、十八世紀中葉から大革命（一七八九―九三年）にかけてのフランスにおいては戰闘的な唯物論・無神論を產み出した。ウォルフやレッシングによつて代表されるドイツの啓蒙は、フランスのそれと異つて甚だ中途半端であり、神學的世界觀から解放されてゐなかつた。カントはカント主義者となる以前、初めウォルフの影響下にあり、この時代には彼は自然科學に少なからぬ關心を示してゐる。彼の「一般自然史と天體理論」（一七五五年）において提起された天體の發展に關する思想（星雲說）は自然の進化、發展を知らなかつた當時の形而上學的見解に最初の打擊を與へた點で劃期的であり、辯證法的思惟の發展史上において特記さるべきものである。カント主義を理解するにはこの事情を念頭から逸してはならない。

カントは、ヒュームの不可知論によつてウォルフ的合理主義（理性の獨斷的使用に基いて勝手な體系を造り上げる方法）の迷夢から醒まされ、人間の理性能力、認識能力についての批判的考察の必要を知り、かくて批判主義を創始

するに至つた、と告白してゐる。そこで、彼の批判哲學を一瞥するならば、彼の初期における自然科學的關心と、次にヒューム主義との影響は、彼が吾々の主觀から獨立な、そして吾々の感官を「觸發」する「物自體」の存在を承認し、しかもその「物自體」の不可知性を主張してゐるといふ事實の中に表現されてゐる。その際、吾々の感官を「觸發」する「物自體」の客觀的存在を認める點ではカントは唯物論的であり、他面において「物自體」を不可知とする點ではヒューム主義者である。

ところが彼は議論の展開につれて次第に唯物論からも不可知論からも遠退き、主觀的觀念論の側に進んでゆく。カントによれば、時間、空間は吾々の意識から獨立なものでなく、實際には吾々の感性（「物自體」によつて「觸發」され、多樣な表象を與へる精神能力、一口にいへば感覺能力）に具備される先天的形式、即ち直觀の先天的形式（ここで先天的といふのは、生得的、遺傳的といふ意味でなく、經驗に論理的に先行するといふ意味である）である。そして多樣な直觀內容に秩序を與へるのは悟性であり、悟性もやはり先天的な概念、即ち範疇（量、質、關係、樣相の四つの部類に分けられる十二の基礎的概念）をもつて働くものであつて、感性は認識の多樣な內容を與へ、悟性はそれに形式を賦與する。それで、時間、空間內に生起する一切の現象は吾々の意識內容に過ず、それらの現象間の秩序、法則は吾々の悟性の被造物だといふことになる。

しかし乍ら主觀的觀念論においては、すでに述べたやうに、存在するとは知覺されてあることだ、といふことが前提されてゐるから、そこでは吾々に知覺されないもの、感覺的に經驗されないものに關しては確實な認識は不可能と見做さなければならない。そこでカントは非物質的な不滅な靈魂、全體としての世界および神に關する一切の議論が

確實性を持たないことを主張して從來の形而上學を否定する。（尤も、それと同じ理由で、經驗の先天的形式としての時間、空間及び範疇に關する彼自身の議論にも確實性がないと言はなければならない。この點で彼は自己矛盾に陷つてゐる）。然るに、カントは、その倫理學において、倫理上の「要請」として意志の自由、靈魂の不滅、神の存在を證明しようと試みる。彼の主張によれば、道德が可能なるためには、人間の自己規定（自律）が、從つて意志の自由が前提され、またこの世界においては道德的完成、最高善の實現が達成されないとか、德行とそれに對する報酬としての幸福とが均り合はないといふ事實からは、靈魂の不滅や神の存在が「要請」される。このやうな「要請」として、これらの形而上學的神學的觀念が肯定されるのである。

カントは、經驗の範圍においては、確實なる認識を持ち得ても、靈魂、自由、神の如き問題を解決し得ない「理論理性」と、これらの問題の肯定的解決を「要請」し、その上に立脚する「實踐理性」との對立を解消させるために一種の目的論的自然觀に訴へてゐる。だが、それによつて彼の哲學は決して一元論的に統一されたのではない。彼の哲學の一大特質は二元論であり、折衷主義である。即ち吾々のすでに見たやうに、カントは、先づ唯物論と觀念論の折衷、妥協の立場から出發し、理性と宗教との調和をもつて終つてゐる。そして直觀と思惟、現象と本質（「物自體」）、個々の現象とその全體としての「世界」等の如き、辯證法的統一において把握さるべき種々の對立物は、全く形而上學的に切離されて取扱はれ、認識の形式は認識の具體的內容から切離されて獨立的に考察の對象とされてゐる。カント主義のこのやうな折衷主義的、形而上學的およびそれに關聯して形式主義的な本質は、當時のドイツ・ブルジアジーの未成熟のイデオロギー的反映である。十八世紀後半から十七世紀初頭にかけてのドイツは多數の封建的王國、

侯國等に分割されており、資本主義的生産はイギリスやフランスに比して極めて未發達であつた。これがためにドイツのブルジョアジーは封建的勢力に對して自己を主張し得るまでに成熟してゐなかつた。だから當時のドイツにおける進歩的階級たるブルジョアジーの哲學者カントにおいては、啓蒙の世界觀は封建的な神學的世界觀と折衷せしめられ、イギリスやフランスにおいては現實的社會生活の原理であつたものが、此處では神學的精神において抽象的、形式的原理として展開された（例へばイギリス人やフランス人における自由競爭や政治的自由の觀念はカントにおいて人格の自律といふが如き抽象的な倫理的觀念として現はれた）。

ドイツの古典的ブルジョア哲學はカントの二元論からフィヒテの主觀的觀念論を經てシェリングにおいて客觀的觀念論に轉化し、ヘーゲルの辯證法的な客觀的觀念論をもつてその最高の發展段階に達した。カントの主觀的觀念論（カント自身は經驗の先天的形式を認めないバークレー流の經驗論的な主觀的觀念論から自己の主觀的觀念論を區別してそれを先驗的觀念論と呼んでゐる）はヘーゲル觀念論の前段階を成しており、その限りそれはヘーゲルによつて、觀念論的にではあるが、批判され、克服された。然るに現代においてもカント主義は、その追隨者を少なからず見出してゐる。それはプロシヤ王を奉戴するユンカー（地主）の指導下になされた統一的ドイツ國家の形成（一八七一年）の後、ユンカー的勢力に對して從屬的な地位しか占め得なかつた弱腰な自由主義ブルジョアジーの哲學として復活し、當時すでに勞働者運動の理論として優越な地位を獲得してゐたマルクス主義の批判の任務を負はされた。

この、復活したカント主義、即ち新カント主義の諸學派は認識論の領域においてはカントにおける唯物論的要素としての「物自體」を排除し、カント主義を全くの主觀的觀念論に改造し、そして彼等によるマルクス主義の批判の試

みは、大體において次の二つの方向において行はれた。第一は、主觀的觀念論の認識論の精神において吾々の主觀から獨立な客觀的な歴史法則を否認し、從つて社會發展に關するマルクスの理論を一概に排斥するといふ方向であり、これはウィンデルバンドやリッカートによつて代表された。第二はマルクスの社會的「理想」に觀念論的・倫理的基礎づけを與へるといふ體裁の下に、マルクス主義からその核心を拔き去り、それを骨拔きにして、勞働者運動をブルジョア自由主義の精神で腐敗させるといふ方向である。これはコーヘンやナトルプを指導者としたマールブルグ學派によつて代表され、この學派に屬するフォーレンダーは新カント派社會主義の代表的理論家である。ベルンシュタインの修正主義にも新カント主義の影響があり、現在ではファッショ的支配機構の一要素と化した社會民主々義はドイツおよびオーストリーにおいては大體、新カント主義によつて支配されてゐる（マックス・アドラー、オットー・バウワー、A・ブラウンタール等）。このやうに新カント主義はすでに反動的色彩をもつて彩られてゐる。だが、世界大戰を轉機として、ブルジョア的反動が自由主義のマスクを棄てて公然とファッショ的形態をとると共に、新カント主義はブルジョアジーの間においては次第に新ヘーゲル主義にその席を讓つて行つた。

新カント主義は帝政ロシヤの自由主義ブルジョアジーの間にも流行し、十九世紀九十年代にはドイツにおけるベルンシュタイン主義より早くにすでにマルクス主義の新カント主義的修正の試みが現はれた。この潮流の代表者ストルーヴェにおいてはカント的形式主義の強い影響が見出される。ストルーヴェは、前にも云つたやうに、ロシヤにおける社會的、經濟的諸問題の取扱に當つて社會的、經濟的過程の具體的、內容的分析に從事しないで、カント主義的に社會發展や經濟發展の抽象的、形式的規定を展開するに止まり、これに關聯して社會過程、經濟過程をその擔ひ手た

る種々の階級の具體的動向から切離して、從つて實踐的見地から全く游離して、ひとえに抽象的に取扱つてゐる。レーニンはストルーヴェのこの抽象的客觀主義に對する無慈悲な批判によつて、エンゲルス以後の國際マルクス主義者の間において新カント主義の最初の、そして最も深刻な批判者たるの地位を獲得したのであつた。これに反しカウツキーは勿論、プレハーノフの如きマルクス主義者ですら、新カント主義に對して妥協的であり、これを徹底的に批判し得なかつた。

帝政ドイツや舊ロシヤにおけると同じく封建制の要素をかなりに殘存せしめてゐる日本においても、新カント主義は封建的勢力に對して鬪志を失ひ、それに從屬するに至つた自由主義ブルジョアジーの哲學として、丁度、明治後半における勞働者運動の勃興前後から大正末期まで最も有力な役割を演じた。桑木嚴翼氏はカント哲學の紹介者、宣傳家として著名であり、所謂西田哲學の出發點はカントの形式主義とベルグソン的情意主義の折衷といふことであり、西田氏の影響下にある田邊元氏の哲學は新カント主義と存在論とヘーゲル辯證法の雜炊である。現在、大體において現象學に轉向してゐる高橋里美氏や山内得立氏の出發點も新カント主義であつた。「マルキシズムの哲學的批判」の著者川合貞一氏はカント主義者であり、マルクス主義の批判者高田保馬氏の社會學はリッカート流の新カント主義に立脚するものである。大體、わが國の現存ブルジョア哲學者の中、明治後半・大正時代から活動してゐる人々で、何らかの仕方でカントの强力な影響を受けてゐないものは一人もない、と云つても決して過言でない。

ヘーゲルの客觀的觀念論

ヘーゲルはカントに發するドイツの古典的觀念論の完成者である。ヘーゲルがカントと異る點は、カント哲學の出發點における唯物論的要素（吾々の感官に作用する「物自體」）を除去してゐる事、

時間、空間從つて自然を吾々の主觀から獨立な、但し本質において精神的な存在として認めてゐること、カントが天體理論において提起し乍らも本來の哲學的問題の考察に當つて放棄した發展の觀念を全哲學體系に貫かせてゐることなどである。これらの特徴によつて、ヘーゲル觀念論は客觀的。辯證法的觀念論として規定される。

ヘーゲルによれば現實世界の本質は理念であつて、理念は個々人の主觀から獨立な精神である。それは最初、「世界創造以前の」神の如きものとして存在し、次に自然に移行する。自然はだから「理念の他在」である。最後に理念はその他在から脱して精神としての自己を恢復し、自己の本來の姿に復歸する。精神のこの運動が取りも直さず人類史の內容である。このやうにヘーゲルは主觀から獨立な客觀的な精神的原理（理念）を立て、そしてそれを自己發展するものとして辯證法的に考察するのである。

從つてヘーゲルにおいては精神の現はれとしての人間の認識もその發展、運動、歷史において把握され、カントにおいて單に列擧され、固定的なものとして取扱はれた種々の範疇は發生史的に相互聯關において、即ちまた辯證法的な運動および統一において理解され、認識の諸形式は精神的內容そのものの發展に卽して展開される。これによつてヘーゲルは、觀念論的立場において可能な限り、カントの形而上學的、形式主義的缺陷を除去した。

しかし乍ら、一體、理念とは何であるか？ ヘーゲルによれば、理念の純粹な姿は論理學において叙述される。理念の內容は論理學であると見做される。そして彼にあつては論理學は認識の歷史、思想史の概括、要約であるから、換言すれば、歷史的に展開される思惟の諸範疇、諸形式を現實における種々の偏形から淨めて整備した體系であるから、結局、理念とは人類の思想を現實世界から抽き離して獨立的な神的な實體にまで誇大したものに外ならない。そ

れはフォイエルバッハの言葉をかりて言へば、人間外に定立された人間の思惟である。だから客觀的觀念論も所詮は主觀的觀念論と同樣に人間の主觀、思惟の絶對化から出發するものである。客觀的觀念論はただこの絶對化された主觀的なものを吾々の主觀の外に想定するだけのことである。

ところで理念の叙述としての論理學は思想史の總決算において與へられるのだから、かかるものとしての論理學を展開したヘーゲルにおいて、思想史は、從つて歴史は完結し、理念はその「他在」や「外化」から完全に自己の純粹なる本質態に復歸してゐるはづである。思想史の觀察からの結論、要約としての論理學の内容をもつて理念の完成的な姿とするヘーゲルにあつては、どうしても歴史が彼において終了したといふことを前提としなければならない。云ひかへれば論理的なものとしての理念を現實世界の本質として想定するヘーゲル觀念論は、その理念の内容を歴史および特に思想史の概括たる論理學において叙述する必要上、結局において歴史、發展に終結を與へ、辯證法を犠牲にし、それを謂はば理念における止揚された契機、從屬的なものにせざるを得なかつた。

次に、ヘーゲルにおいては發展するものは概念、思惟、理性、精神（これらは何れも理念の別名である）であるから、「理念の他在」としての自然に關しては、その本質、その内奥を成すところの概念の論理的發展が認められるのみで、物質的なものの發展、時間的發展は否認される。

かやうにヘーゲルはその非科學的な觀念論的體系の故に、科學的方法としての辯證法を充分に展開し得ず、それを神秘化し、畸形化してゐる。辯證法はただ唯物論の土臺の上でのみ正しく展開される。

ヘーゲルのかやうな不徹底さは彼がブルジョア・イデオローグであり、ブルジョア社會をもつて歴史の最高段階、

完成段階と見做し、ブルジョア社會より將來の新しい社會秩序、新しい歴史を豫見し得なかつたことによつて制約される。何故なら、歴史がブルジョア社會をもつて完成するならば、ヘーゲルにおいて理念の運動が完成したと見てさしつかへないからである。

ヘーゲルはカントと同じくユンカー的支配に對して妥協的なドイツの自由主義ブルジョアジーの哲學者として、立憲王制が最高の國家形態であるといふ見解や、國家は「客觀的精神」の實現であり、かかるものとしては自己目的であるといふ國家主義（又は國家至上主義 —— etatism）の主張によつてプロシヤ・モナルヒーを辯護した。これに反し、一切のものは發生、發展、沒落の經過に從ひ、現存する一切のものは・・・に沒落して新しいものに代られる、と敎へる・・・辯證法は、本來的には抽象的な論理的法則として、しかも觀念論的に歪曲されて表現されてゐる。ここに吾々はプロレタリアートの擡頭以前におけるドイツ自由主義のイデオローグとしてのヘーゲルにおける反動的側面と進步的側面の絡み合ひを確認することが出來る。

戰後のドイツにおいて「ヘーゲル復興」が聲高く叫ばれ始めたのは、一般的には、カント主義よりも神秘的な側面を有するヘーゲル觀念論が、混亂したブルジョアジーの氣分に投じたからであり、特殊的には、ヘーゲル流の國家主義や「民族精神」の理論がファッショ化したブルジョアジーの政治的主張に合致するからである。そこで、新ヘーゲル主義はヘーゲルにおける科學的、合理的要素を悉く放棄し、ただ神秘的および反動的側面を「復興」したものである。新ヘーゲル主義における神秘主義や、ヘーゲルに比しての理論的後退は、理論的には現象學的哲學やカント主義の要素との結合に由來してゐる。そして新ヘーゲル主義の反動性は、それがイタリー・ファッシズムの公認哲學であ

ること、ドイツにおけるヒットラー黨の國家理論、民族理論がヘーゲルのそれと多分に類緣を有してゐることを想起するだけでも充分である。ヒットラーの「第三帝國」の觀念はヘーゲル的國家主義および民族主義と合致するものである。シュパンのファッショ的な「普遍主義的國家觀」はヘーゲルの國家主義から著しい影響を受けており、シュペングラーの人種論的民族理論は個性ある生きた全體としての「民族精神」に關するヘーゲルの見解と多くの點において一致する。グロックナーやクローナーに指導されるドイツの新ヘーゲル主義者はヘーゲルの「法律哲學」や「歷史哲學」からファッショ的理論を導き出すために多大の努力を費してゐる。

かやうにブルジョアジーの間で「ヘーゲルに歸れ」の叫びが高くなつたのに應じて、社會民主々義者の間においてもヘーゲルへの關心が高められ、新カント主義からヘーゲル主義への移行、乃至はヘーゲル辯證法とカント主義との結合等の過程が始まつてゐる。

ヘーゲルの觀念論的辯證法はマルクス、エンゲルスによつて唯物辯證法に改作され、そのことによつてマルクス主義の理論的源泉の一つとして役立つてゐる。ヘーゲル辯證法の唯物論的改作がマルクス主義哲學の發展のために缺くべからざる仕事であることは、レーニンも強調して止まなかつた。しかし乍らこの課題の正しい解決は、ヘーゲル辯證法を現代の先進的實踐の見地から、科學の現代的水準に立脚して、自然および社會の諸事象の具體的究明に基いて究明して初めて可能である。このことがなければ、ヘーゲルを唯物論的に批判し、彼の辯證法における觀念論的神秘化の要素を除去し、「合理的萠芽」を一層展開するといふことは不可能であり、却つて辯證法的唯物論に觀念論の要素を浸透させる結果になる。ソヴェート聯邦において新經濟政策の時代に繁榮したデボーリン一派のメンシェヴィズ

ム化しつつある觀念論はその典型的な場合である。デボーリン主義の理論的內容において、「唯物辯證法の觀念論的修正」、「ヘーゲル哲學の最重要な諸契機の、唯物論的改造なしの攝取」といふことは、哲學におけるレーニン的段階の無視といふことと共に本質的に重要な要素を成してゐる。「ヘーゲルを唯物論的に讀む」ことは、單にヘーゲルの言葉を抽象的に解釋することではない。それは現代の科學の達成および社會過程の具體的分析への適用において、即ち具體的な、しかも、現代において積極的意義ある研究との結合において、哲學的科學としての辯證法を研鑽するといふ立場から、ヘーゲルの遺產を批判的に攝取することを意味する。

西ヨーロッパにおける「ヘーゲル復興」は、わが國におけるファッショ化しつつあるブルジョア自由主義の哲學者の間にも反響を見出し、彼等の間においても辯證法は一つの流行となるに至つた。しかし、それは勿論、觀念論的辯證法であり、その際、自由主義ブルジョアジーの哲學者達にとつて特徵的なことは、彼等がヘーゲル辯證法をカント主義や存在論と結合させてゐることである。田邊元氏の「絕對辯證法」、大江精志郎氏の「辯證法的存在論」の如き、亦「辯證法の存在論的解明」を企てる三木清氏等はその一例である。これと異つて、半封建的要素を中核とする日本ファッシズムの哲學者紀平正美氏の如きは、疾くからヘーゲル辯證法の俗流解說家であり、彼の國家＝民族理論の日本への適用者として知られてゐる。日本ファッシズムの理論的活動の活況に關聯して、ヘーゲル主義的な反動的社會＝國家學說が、種々の俗流化された形で宣傳され始めたことは注目さるべき事實である。またファッシズムの純然たる御用宗教となつてゐる佛教の理論家の一部が「佛教辯證法」を口にし、佛教聖典におけるアジア的神秘主義に辯證法のレッテルを貼らうとしてゐるが如きは理論的には全く取るに足らぬとは云へ、それも觀念論的辯證法が如何にフ

ッシズムにとつて受け容れ易いものであるかといふことの證明としては興味のないことではない。

以上のやうな事情のために、ヘーゲルにおける合理的要素の攝取は、同時に彼の反動的方面と、それの一面的誇張に依據するファッショ的新ヘーゲル主義とに對する容赦なき批判を伴はなくては成功的に行はれない。

第三節　形而上學的唯物論

近代唯物論の母國はイギリスである。イギリスにおいてはすでに十六世紀以來、マルクスのいはゆるマニュファクチュア時代が始まり、商業資本が目ざましく成長し（例へば東インド商會は一六〇〇年に創立されてゐる）、一六四九年にはブルジョア革命が成功し、一六五八年まで共和制が續き、共和制の倒壞、スチュアート家の復位による封建的反動の支配が一六八八年（「名譽革命」）に覆されるや、議會によつてその階級的利益を代表されたブルジョアジーは貴族と共に支配階級を構成した。そこで、イギリスにおいては早くより封建的な神學的スコラ哲學に對して資本主義的發展の利益を代表する新興哲學が醸成され、十七世紀初頭にはベーコンの經驗論が現はれた。ベーコンは、知識は力なり。といふ見地からブルジョア自然科學の發展に主要關心を向け、科學の發展のためにはスコラ的な思辨、空虛な推理を排して經驗に訴へなければならないと主張した。彼にあつては經驗は吾々の感官に對する外界の物質的實在の刺戟から發生するものであるから、彼の經驗論は本質上、唯物論であり、彼は「イギリスの唯物論および一般に近代の經驗科學の眞の始祖」（マルクス）である。ベーコンから出たホッブスは前者の唯物論における有神論的偏見を徹

廢し、次いでロックがイギリス經驗論の代表者として登場した。そしてロックの經驗論もベーコンのそれと同樣に、その出發點においては唯物論的でありながら、他方では神學を否定しなかつた。ヒュームの不可知論は、吾々の認識は感覺から始まるといふ經驗論の見解を取り上げ、同時に感覺の原因たる外界の存在についての認識の可能性を疑ふことによつて成立し、バークレーの觀念論はこの外界の存在を否定することによつて生れたものである。

だが他方では、イギリスの經驗論はフランス唯物論の源泉として役立つた。マルクスは、フランス唯物論はロックとデカルトに發してゐると云つてゐる。デカルトはベーコンより少し後れて、十七世紀前半に活動し、彼の合理論はベーコンの經驗論と共に近代哲學の二大源流と見做されてゐる。デカルトの方法は一切のものを理性の審判に付し、ただ理性の前で辯明され、理性によつて論證されるもののみを眞理として承認する點で合理論と呼ばれる。合理論は經驗論とは異つた行き方で獨斷的、神學的世界觀と鬪つてゐるものであり、その限りそれはフランスにおいて封建的支配に對する反對派として成長し始めたブルジョアジーの氣分の反映である。しかしデカルトの世界觀は甚だ不徹底であつて、彼は延長（廣がり）を屬性とする物質と、思惟を屬性とする精神とは互ひに獨立な實體であると主張して二元論を唱へ、しかも物質と精神は神の被造物であると見做して神學的世界觀と妥協した。そこでデカルト說は、一方においてはフランスにおけるマールブランシュの形而上學やドイツにおけるライプニッツ、ウォルフの合理主義的觀念論の出發點となり、他方においては彼の二元論における、物質は精神から獨立な實體であるといふ方面を强調したデカルト學派（例へばルロア）はここから、精神は物質に依存するといふ唯物論的結論に到達し、デカルトから出てデカルトの形而上學に反對した。近代原子論の哲學的先行者たるデモクリートやエピクールの古代唯物論を復活さ

せたことにおいて多大の功績を有するガッサンヂもデカルトの形而上學の猛烈な反對者であつた。オランダの哲學者スピノザは實體に關するデカルトの二元論的學說を、思惟と延長（空間的廣がり）は唯一の物質的實體（自然）の屬性であるといふ唯物論的學說に改造し、この見地から聖書批判を遂行して、その後の無神論的世界觀の發展に大きな影響を及ぼした。

ラメトリー、エルヴェシウス、ディドロー、ドルバック等によつて代表される十八世紀のフランス唯物論は、前世紀から承けつがれた右のやうな思想的傳統の地盤の上に、封建貴族および僧侶の支配に對するブルジョアジーの鬪爭の哲學として成長した。それは一七八九＝九三年のブルジョア革命の思想的準備であつた。モンテスキューやヴォルテールの名に結びついてゐるフランスの啓蒙はイギリス流の政治思想、ロックの經驗論、ニュートン物理學の紹介、普及と並行せる政治批判、宗教批判、自然科學的思想の宣傳を主要內容とするものであるが、その間にあつて宗教批判を當時の自然科學の水準（それはニュートン力學によつて代表された）に立つて、最も勇敢に遂行したのは唯物論者である。フランスの唯物論者によつて書かれた、機智に富んだ、痛烈な、果敢な無神論的文獻は、彼等の哲學的見解が古びてしまつた現代においてもなほ大衆の啓蒙のためには少なからぬ役割を演じ得る、といふことをエンゲルスもレーニンも指摘してゐる。

フランス唯物論の基本的主張は次の如くである。

（1）自然の存在はその原因を自然自身の中に持つのであつて、神といふ如き精神的、超自然的原因や創造者を有しない。

(2) 人間は自然の一部分であり、從つて意識は自然、物質の屬性であり、かかるものとしてそれは外界の自然現象を適應的に認識し得る、即ち模寫する。認識は吾々の感官に對する外界の存在の刺戟から發生し（感覺）、吾々の思惟能力によつて外界の法則は認識される。

(3) 質的に多樣な姿を呈してゐるあらゆる自然現象は、物質要素（當時は分子が物質の窮局要素と見做された）の機械的運動による種々の組み合せにおいて成立する。（機械的運動とは、空間的位置變化の如く外力――他の物體から傳達される力――が加はつて初めて生ずる運動形態のことである）。

(4) 從つてあらゆる自然現象、自然過程は自然の物質要素の結合、分解、再結合の無限の反覆過程として觀察される。

(5) 歴史においては人間の意志から獨立な客觀的合法則性はなく、歴史過程は立法者の意志や輿論によつて支配される。

(6) 萬人は生れた瞬間においては平等であり、尊卑の別は存しない。各人は利己的であるが眞の利己は萬人の利己、幸福との一致においてのみ實現される。然るに惡しき立法のおかげで、人々は社會的に不平等であり、少數者の反社會的な利己心のために多數者の幸福は犧牲にされ、多數者の善き天性は歪められる。

この、第一の主張によつてフランスの唯物論者は僧侶主義、神學と戰ひ、第二の主張によつて不可知論に對立する模寫論を展開した。ところが、第三、第四および第五の命題はフランス唯物論の弱點を表現してゐる。即ち、第三の命題は物質の種々の運動形態――熱、光、電氣、化學的化合と分解等の如き――を、ただ一つの機械的運動に還元す

る見解を意味し、その理由で機械論的である。これは、主として、當時の自然科學においては、機械的運動を研究する力學以外の科學は未だ萠芽期にあつたといふ事情によつて制約された。第四の命題は、自然現象を發展の見地から歴史的に考察しようとしない形而上學的見解の表現である。形而上學といふ言葉は、現實世界の上に超現實的なもの（神、絶對精神等）を想定する學說、即ち大體において觀念論を意味するものでもあるが、ここで形而上學的といふのは反辯證法的といふ意味である。かかる特質のためにフランス唯物論は機械的唯物論とか、形而上學的唯物論と呼ばれる。次に第五の命題は、フランスの唯物論者が歴史觀の領域においては形而上學的、觀念論的であつたことを示すものである。彼等はブルジョアジーのイデオローグとして、封建貴族や僧侶の支配を不合理なものと見做し、それに對して社會の合理的な改造を唱へた。かやうに、過去の歴史はひとえに不合理なものとして排除されたから、その歴史の中に貫いてゐる客觀的法則、社會の發展法則は洞察されなかつたし、またこれに關聯して不合理な社會秩序から合理的な秩序への改造の過程が一定の客觀的合法則性に從ふといふことも理解されなかつた。そこで、社會的理想の宣傳、啓蒙が、云ひかへれば思想の力が、新社會創造の原動力となり得ると考へた彼等は、啓蒙活動を社會改革のための民衆の運動に結びつけ、その一環として展開することを知らなかつた。つまり、觀念論的、形而上學的歴史觀に禍されて理論を實踐に結びつけ、それを實踐の觀點から展開し得なかつた。そしてかういふ非實踐的、觀照的な態度の故に彼等は、人間の認識をば實踐を原動力として發展するものとして、辯證法的に考察せず、模寫論に辯證法を適用することが出來なかつた。

最後に、先にあげた第六の倫理學的見解（倫理學は特にエルヴェシウスによつて展開された）によつて、フランス

唯物論は十九世紀前半の空想的社會主義の思想的源泉となつた。これは特に注目さるべき事實である。しかし乍ら十八世紀の唯物論者自身においてはこの見解はブルジョア的な經濟行爲や生活態度の辯明以上のものではなかつた。

十九世紀の四十年代に、一八四八年の失敗せるブルジョア革命を前にして、ドイツにおいても封建的イデオロギーたる當時のキリスト教に對する鬪爭の中から無神論が生れた。フォイエルバッハの唯物論がそれである。フォイエルバッハは、宗教は人間の無智による空想の產物であり、人間が自然との鬪爭において無力なために、超人間的な全能的なしかも人間的な存在（神）を空想し、この空想的存在者に救援を祈願することにおいて成立する、と主張した。それで、彼によれば、宗教の本質は人間の本質であり、神とは人間の本質、欲望、人間性の空想的實現であり、人間の諸性質（思惟、意志、德等）を最高度に、完全に實現し、具有する空想的實體である。このやうに彼は神學を人間學に解消し、その際、人間學は彼にあつては、人間は自然の一部分であり、人間精神は自然の所產であるといふ唯物論的見解に基いてゐた。しかし乍ら彼は人間を具體的に、その社會的、歷史的存在において把握せず、單に抽象的個體、あらゆる歷史的時代、あらゆる社會的地位の下において本質上同一な實體としてのみ理解したために、宗教の發生、發展の社會的、歷史的根據を明かにせず、從つてまた宗教は大衆の無智を利用する僧侶や支配階級の欺瞞的な作り物であるといふフランス唯物論者の欺瞞說以上に大して進み得なかつた。このことはフォイエルバッハが歷史の領域に唯物論を貫徹させ、社會發展の客觀的合法則性の觀點の下に、社會的なもの、歷史的なものとしての宗教を解明することが出來なかつたといふことを意味する。大體においてフォイエルバッハのブルジョア的局限性の故に彼の唯物論はフランス唯物論の缺陷を克服し得ず、形而上學的、觀照的唯物論の範圍を出ることが出來なかつた。彼はヘー

ゲルから唯物論に轉向する場合に、ヘーゲルの觀念論と同時に辯證法をも簡單に放棄したのである。

フォイエルバッハに續いてあらはれ、統一ドイツ國家の形成の時代まで反政府的な自由主義ブルジョアジーの間に普及した俗流唯物論（それはフォークト、ビュヒナー、モレショット等によつて代表される）も、當時の發展した自然科學――特に物理學、生物學、生理學――に依據しながら、フォイエルバッハと同じく舊唯物論の限界を出なかつた。否、それは、フォイエルバッハの唯物論よりも一層眼界の狹少な、自然科學的世界觀であつた。

形而上學的唯物論は辯證法的唯物論によつて徹底的に克服されてゐる。然るに現代においてもそれは、未だ辯證的唯物論を知らないブルジョア自然科學者＝唯物論者の間には、主として機械論の形態において存續してゐる。機械論はソヴェート聯邦においてもデボーリン主義と共に辯證法的唯物論の名稱をもつて宣傳されてゐたが、それは、社會過程を生物學的過程に、そして後者を物理＝化學的過程に、更に物理＝化學的過程を力學的過程に還元し得るものと見做し（還元論）、辯證法の根本法則を力の均衡關係から生じる機械的運動の法則として說明する（均衡論）點で機械論と呼ばれる。機械論者もマルクス主義哲學の發展におけるレーニン的段階を無視することにおいてはデボーリン主義者と同樣である。

日本においては明治時代のブルジョア唯物論者はいづれも形而上學的、機械論的であり、歷史觀においては觀念論的であつた。加藤弘之の如きは進化論に依據して、發展の見地に立ちながらも、就中、社會發展を生存競爭といふ生物學的範疇によつて說明し、社會過程を生物學的過程に還元してゐる點で機械論者であつた。現代においては大森義太郎氏を代表者とする「勞農派」の唯物論は著しく機械論的である。

形而上學的唯物論、特に現代の機械論に對する批判も辯證法的唯物論の闡明、發展のための不可缺な仕事である。特に現代自然科學の哲學の批判に當つては、機械的唯物論の局限性の指摘、辯證法的唯物論の正當性の解明は、自然科學において機械論的見解が破綻し、多くの學者が觀念論に迷ひ込んでゐるといふ事情のために、決定的に重要な課題である。

最後に、唯物論および哲學の最高の、最も科學的な形態としての辯證法的唯物論については、次の章で述べることにする。

第四章　辯證法的唯物論

第一節　辯證法的唯物論の對象

辯證法的唯物論の理論的內容を說明するに先立つて、一體この哲學の對象は何であるかといふ疑問に答へて置く必要がある。さうでないと、哲學を神秘化する觀念論や、それを無用視又は否定する個別科學萬能主義の偏見を克服して、眞に科學的な哲學としての辯證法的唯物論を確立することは出來ない。

觀念論者は、物質的現實世界とは別箇な空想の王國を設定し、これを哲學の對象として規定する。感覺を「世界要素」と見做すマッハ主義においては感覺からの經驗的世界の生成の過程の究明が問題であるが、そこでは感覺の擔ひ手たる主觀は經驗的實在世界以前のもの、超經驗的なものとして前提される。だから、より徹底した觀念論においては、この超經驗的先天的な意識の世界、又は主觀と客觀の「直接的統一」、主觀と客觀の未分の原始世界が哲學の對象となり、その內容を解明することが問題とされる。その際、カント主義者はこの超經驗的の、又は經驗以前の世界を論理的なものと解釋してその內容を思惟的反省によつて把へようと試み、ベルグソン主義者はそれをただ體驗的に直觀されるのみで思惟的分析に付されない神秘的實在と見做し、現象學派はそれを直觀したる上で、その直觀內容なるも

のの分析的記述を試みる。ヘーゲルの客觀的觀念論においては哲學の對象は現實世界の先行者にして同時にその本質たるところの「精神」であり、それはひとえに思辨的に把握される。

このやうに觀念論者は現實世界とは別な、獨立的な對象を構想するために、彼等にあつては哲學は神秘化され、神學化されて、現實的物質世界の個々の分野を研究對象とする個別科學から全く游離せしめられてゐる。

然るに物質的實在世界以外の世界はどこにも存在しない。人間の意識もまたこの世界の一部分である。

だが、ここからして、現實世界の個々の特殊部分を研究對象とする個別科學——各種の自然科學と社會科學——以外には如何なる學問も無用だ、と結論するのは誤謬である。周知のやうに、哲學を輕蔑する自然科學者は屢々このやうな誤謬を犯してゐる。しかし乍ら各々の個別科學はその對象とする特殊な領域に固有な特殊法則を闡明するだけであつて、決して統一的な世界觀を與へない。例へば物理學は生物の進化や社會過程のなかに貫いてゐる法則を明かにすることは出來ないし、生理學は社會發展の法則を闡明しない。それで、統一的な世界觀が可能なためには、各種の個別科學の成果の單なる羅列や寄せ集めでなくて、それらの成果の概括を通して現實世界のあらゆる領域に妥當する一般的な法則、範疇を見出すことが必要である。ところで統一的な世界觀なしには吾々は個々の科學を正しく位置づけ、諸々の個別科學間の聯關を正しく把握することも、社會的活動の原則を正しく設定することも出來ないから、個別諸科學の成果の概括といふことは不可避的である。そして辯證法的唯物論は正にかやうな概括において成り立つ哲學である。だから、それは個別科學から決して游離することは出來ない。同時に、經驗、實驗に訴へる個別科學の成果の概括に當つては理論的思惟が要求される以上、辯證法的唯物論は單なる實驗的、經驗的科學ではない。だからこ

そ、それは哲學と呼ばれるのである。

だがこの理論的思惟を個別科學から抽き離し、思辨化するならば、吾々は觀念論者の誤謬に陷ることとなる。辯證法を、勞働者階級のプラクシスが提起する具體的な問題や一般に個別科學から切離して、主にヘーゲルの著作から學び取らうとしたデボーリン學派はかやうな誤謬に陷り、その結果、彼等の辯證法は唯物辯證法でなくて、觀念論的辯證法となつた。

これに反し機械論者は經驗的個別科學に追隨し、辯證法的唯物論を個別科學に解消し、現代自然科學の結論をもつてマルクス主義哲學に代へようと企てた。このやうな誤謬は自然科學萬能主義を奉ずる多くの素朴な機械的唯物論者の抱懷するところである。ところが彼等といへども統一的な世界觀を持たずに濟ますことは出來ない。そこで彼等が世界觀を構成しようと試みる場合には、大低は、自然科學的法則を機械的に歴史の領域に移入し、例へば、生存競爭といふ樣な生物學的特殊法則をもつて社會過程を說明しようとする。いはゆる社會ダーウィニズムがそれであるが、このやうな方法をもつてしては社會過程に固有な內在的法則は少しも把握されない。これは、哲學に對して否定的な態度をとる機械論者、個別科學萬能主義者が如何に間違つた世界觀に到達するかといふことの例證である。日本のブルジョア唯物論者の間では加藤弘之がこの誤謬を典型的に代表してゐる。

辯證法的唯物論は觀念論や機械論と異つて、個別科學の成果の概括をその課題とするのだから、その對象は現實世界から獨立な架空の世界でもなく、個別科學によつて研究される各種の特殊な現象領域の特殊法則でもなくて、現實世界――外界およびその反映たる人間の思惟――の一般法則である。ところで形而上學の見解に反して、現實世界は

運動し發展するものであるから、嚴密にいへば辯證法的唯物論の對象は外界および人間の思惟の運動の一般法則、自然、社會および人間精神の一般的發展法則である。そして辯證法は運動、發展に關する最も深刻な理論であり、從つて辯證法的唯物論こそは現實世界の一般的運動法則の最も科學的な、最も正しい把握を與へるものである。それはヘーゲル流の觀念論的辯證法のやうに現實世界から切離された「精神」、「理念」の發展の一般法則を問題とするものでは斷じてない。辯證法的唯物論においては人間の思惟の發展、いはゆる主觀的辯證法は客觀世界の發展、いはゆる客觀的辯證法の反映であつて、ヘーゲルにおける如くその逆に後者が前者の反映なのではない。

それと同時に、マルクス主義においては現實世界の運動の一般法則のみが哲學の對象として殘されるから、個々の科學についてその先天的成立條件を見出さうとするカント主義的な數理哲學、社會哲學、經濟哲學等や、個々の科學の對象を「精神」の顯現として思辨的に觀照するヘーゲル流の自然哲學や歷史哲學は否定される。ただ各種の自然科學と社會科學が存在を許され、そして自然諸科學の成果の概括としての自然辯證法と社會諸科學の成果の概括としての史的唯物論が辯證法的唯物論と各々の個別科學との間の謂はば媒介の環として成り立つのみである。その場合、自然辯證法と史的唯物論が自然哲學や社會哲學、歷史哲學から根本的に區別されるものであることは勿論である。

最後に、屢々觀念論者によつて、特にカント主義者によつて哲學の一部門とされる倫理學、美學、宗教論はマルクス主義においては哲學的科學と見做されないで、社會現象として史的唯物論の一部門――イデオロギー論――において考究される。從來の哲學の內容のうちマルクス主義において哲學的科學として認められるのは主に認識論であり、これが辯證法的唯物論の排他的內容である。何故なら、各種の個別科學の成果を概括することは認識の發展に關する

一般理論を與へることであつて、道德や藝術や宗教には無關係だからである。

第二節　辯證法的唯物論の認識論の基礎

物質・運動
空間・時間

吾々はさきに、存在と思惟、物質と精神の關係の問題が哲學の根本問題であり、存在、物質を根源的と主張するのが唯物論であるといふことを見た。辯證法的唯物論も唯物論である以上、物質の根源性に關するこの主張に加擔し、それを認識論の出發點とする。だがその際、辯證法的唯物論は、物質について舊來の唯物論よりもはるかに深刻な見解を展開する。

それならば、一體、物質とは何であるか？　物質とは、哲學的に定義すれば、吾々の意識から獨立に客觀的に存在し、そして感覺を通して吾々の意識に反映し得るもののことである。物質の構造、その一般的構成要素の究明は物理學の課題であつて、認識論の仕事ではない。だから物質は原子から成立し、原子は陽電氣を帶びた粒子（プロトン）と陰電氣を帶びた電子から成立する、といふやうな規定は、物質の物理學的定義であつて、哲學的定義ではなく、それは物理學の發展につれて不斷に變改される。しかし乍ら、物質の構造に關する物理學的研究は、物質をもつて觀念だとか、感覺の束だとか見做す觀念論者のたわごとを益々反駁し、物質の客觀的實在性を主張する唯物論の正しさを益々確證する。

物質の最も根本的な性質、本質的な規定は運動である。ところでここに運動とは單なる空間的移動、位置變化のこ

とでなくて、變化一般のことである。こういふ意味の運動なき物質は存在しない。如何なる物を取つて見ても、固定不變のものはあり得ない。運動は物質に内在する固有な性質であつて、外部から與へられるものではない。だから、それは發生するものではなくて、物質の存在と共に具有されており、從つてただ形態を變へたり、傳達されたりするのみである。そして一切の自然現象は物質の種々の運動形態である。

十八世紀には運動は單に位置變化として理解されてゐたので、當時の唯物論者は、運動は一つの物體に對する他の物體の働きかけによつて發生するものと考へた。云ひかへれば、運動は物質の自己運動、内在的運動として理解されず、物質にとつて外的なもの、外部から賦與されるものとして理解された。だがこのやうな理解においては、ニュートンがやつたやうに、世界に最初に運動を賦與した第一原因、最初の衝撃者としての神を假定しなければならない。かやうな神學的見解を避けるためにフランスの唯物論者は自然の自己原因といふスピノザの思想を採り入れ、物質世界全體の自己運動を認めた。しかし彼等は物質の各種の運動形態における自己運動の契機を無視し、運動を單なる機械的運動、位置變化に還元した。

辯證法的唯物論はこれと異つて、物質世界のあらゆる部分にその自己運動が内在し、從つて物質のすべての運動形態には固有な法則があることを主張する。位置變化、熱、電氣、磁氣、光、化學的化合と分解、生命――これらすべての物質の運動形態には固有な法則がある（社會過程の物質性については後で述べる）。しかしながら、種々の運動形態は互ひに形而上學的に切離されてはゐないから、それらのものが互ひに轉化することは勿論である（但し今の所實驗的に物理的＝化學的形態を生命へ轉化させることには成功してゐないが）。

運動が物質の本質的規定であり、内在的性質であるとすれば、物質なき運動と云ふことは、運動なき物質といふのと同様に虚妄である。だから、物質の一切の運動がその形態變化や傳達の際に一定の「仕事」をなす關係上、それが「仕事」の能力として考察され、かかるものとしては力とかエネルギーとか呼ばれるといふ事實から、力又はエネルギーを實體視しそれを物質とは別な要因として、亦更に進んでは運動の原因として解釋するのは大きな誤謬である。物質から切離され、獨立せしめられた運動、又は運動の原因と見做された力およびエネルギー――かやうなものはすでに神秘的、觀念論的逸脱の産物である。特に、運動の原因に物質でなくて力やエネルギーを置くならば、物質は何處かへ放逐され、それと共に唯物論も除外される。物理學者ヘルムホルツやオストワルトがこのやうな偏向に傾いたのは周知のことであるが、わが國では明治中葉に唯物論に對抗して盛んに佛教的、僧侶的觀念論の宣傳に腐心した井上圓了はその著「破唯物論」において「唯力一元論」なる素朴な理論を唱へ、精神的なものとしての力が世界の本質であつて物質は力の現はれにすぎないと主張し、また大體において唯物論者であつた加藤弘之も物質とは別箇なものとしての力又はエネルギーの存在を認め、物質と力の「平等合一體」が世界の本質であると規定し、自己の學説を「唯物主義」と「勢力主義」から區別して「力物平等本體主義」とか「力物主義」と呼んだ（「自然と倫理」）。これらすべては運動が物質の内在的屬性であることを理解せず、それを獨立的なものとする間違つた見解からの歸結である。

十七―八世紀の唯物論者は決して運動を物質から獨立な神秘的實體と見做しはしなかつた。だが彼等が運動を物質の自己運動、内的本質的性質、即ち屬性として把握し得なかつたことは既に言及した通りである。で、彼等にとつては物質の不可缺な本質的性質は延長（空間性、擴がり）といふことであつた。物質は空間を外にしては存在しないと

いふこと――これは全く自明の眞理である。

ところで物質は運動し、變化するものであつて、運動・變化にとつては單に空間のみでなく、時間もまた不可缺な條件である。變化とか運動とかいふことは、物質の狀態が或る時點と他の時點において異つてゐるといふ事情のうちに表現されるものであり、從つて時間なしには不可能である。そこで吾々は、空間と時間が存在の根本形式であり、運動する物質は空間および時間を外にしては存在も運動もし得ない、といふことを知るのである。

空間と時間はかやうに物質の存在および運動の根本形式、根本條件であるから、それは吾々の意識から獨立に客觀的に成立するものであつて、觀念論者の考へるやうに決して吾々の意識の形式ではない。空間・時間は直觀の先天的形式である抔といふカントの見解が正しくないのは勿論である。空間・時間は吾々の意識から獨立なものであるが故に、それに關する人間の認識は固定不變でなく、自然科學の發展につれて進歩する。嘗つては空間は三次元であり、空間と時間は二つの獨立な要因と見做されたが、現代物理學は、空間と時間が三つの空間坐標と一つの時間坐標から成立する四次元世界において不可分に統一されており、時間なき空間はなく、空間なき時間はないこと、その際、空間と時間のこの結合の基礎には運動する物質が横はつてゐることを教へる。空間・時間は互ひに分離出來ないものであり、物質の運動における根本的契機である。

物質の運動は單に同じことの繰返し、循環に止まるのではない。そこには新しいものの發生があり、發展がある。そして自然の發展を觀察するならば、無定形なガス狀星雲が球狀星雲、紡錘狀星雲、螺狀星雲の段階を經て一群の恒星へ發展すること、すべての恒星はその凝縮過程において初め熱輻射の增大の過程をたどり、次に冷却過程に入ると

いふこと、即ちそれは赤巨星、黃巨星、白星、黃矮星、赤矮星の順序を經て最後に冷却し切つた暗黑體になるといふことが確認される。しかし宇宙の一切の星が冷却し、光を失つて死んでしまふ時期が來ると考へるのは輕卒である。時々天空内に大變革が起り、暗黑の恒星が爆發して再びガス狀團塊に歸るといふ事實が觀察される。かくして自然の若返りが行はれ、自然はその死灰のなかから不斷に蘇つてくる。自然のこのやうな大きな周期をもつてする運動において、その個々の段階は發展の段階として考察されなければならない。

地球はすべての惑星と同樣に恒星たる太陽の初期發展段階（赤巨星の段階）において、近傍を通過した天體の引力のために太陽の内部から吐き出された液體物質の柱が千切れ、凝縮した結果、他の太陽系の惑星と一緒に出來たものと見做され、その年齡は二、三十億年以上と推定される。そして太陽および地球の冷却過程（現在太陽は黃矮星であり、地球は光のない暗い天體である）において、地球上に一定の條件が作り出されたとき、無機物質の一定の結合から單純な有機體が發生し、有機體はその發展過程において感覺を產み、最後に思惟する腦を作り出すに到つた。

意識

そこで、意識は何ら超自然的なものでなくて自然の產物であることが分る。意識とは高度の有組織物質の一性質であり、その最高發展段階を示すものは人間の思惟である。だから無機物質や無生命の物體に意識や魂があると考へるディドローやプレハーノフの普遍的生氣說は、原始宗敎における自然崇拜と、程度の相異はあるにせよ、誤謬である點においては同樣である。

意識は、特に、能動的な空間的運動を營む有機體、即ち動物において運動の方向付けの必要に關聯して發展したものであるから、最初それは環境、外界に關する感覺として發生するのであつて、決して觀念論者が屢々言ふやうに自

己意識として本來的に存立するのではない。自己意識は人類の發展史の産物である。

人間の認識は外界に關する彼の感覺から發展する。從つて認識は元來外界の物、現象、過程を自己に對して明確らしめることにおいて成り立ち、その任務は外界に關する正確な思考的映像を描き出すことである。生物進化の理論は環境の諸條件に適應せぬ個體や種は亡びるといふことを示してくれる。もし人間の感覺が外界に關する歪んだ表象のみを與へるものとすれば、人間は生存し得ないだらう。無いものが見えたり、眼前に有るものが見えなかつたりするのは狂人であつて、健全な人間ではない。狂人は社會生活における落伍者であるが、もし人類全體が狂氣になるとしたら、人類は自然との闘爭において落伍者となり、滅亡するだらう。だから意識は、外界の認識において、その正確な映像を作り出さなければならないし、また元來作り出し得るものである。一言でいへば、吾々の認識は本來的には外界を模寫することにおいて成立する。

かういふ見解、即ち模寫論はあらゆる徹底した唯物論的認識論の主張であり、そこでは、一切の認識は感覺から、經驗から出發するといふこと、かやうにして發生する認識は客觀的實在の模寫であるといふことが肝腎な點である。この主張によつて唯物論的認識論は認識を精神や意識の自足的活動の所産とする觀念論的見解と鋭く對立する。

客觀的觀念論者は人間の主觀の外に客觀的實在が存在し、それが主觀によつて模寫されることを認める。しかし彼等にあつては客觀的實在なるものは實は精神的なものであるから、それが人間の意識によつて認識されてゐることは客觀的實在の形態における精神的實體が人間の意識において自己を把握し、自己を認識してゐるといふことに外ならない。だから彼等においては人間の認識はつまりは精神とか超人間的意識とかいふものの働きの結果であり、精神の

自覺、自己意識であつて、非精神的なもの、物質的なものを人間の意識が模寫したものではない。眞の認識は天上のイデヤ（理念）の模寫であるといふプラトンの學說や、認識は絕對精神の自己發展＝自己認識であるといふヘーゲルの見解がこの種のものである。それは眞實の模寫論、即ち唯物論的模寫論とは嚴密に區別される。

主觀的觀念論にあつては人間の意識によつて模寫さるべき外界の存在は、如何なる意味においても否定される。主觀的觀念論者にとつては一切のものは主觀の意識內容であるから、例へば私が山、川、木、家等を見るとすれば、それらの對象はただ私の認識として成立してゐるのみであり、かかるものとしては私の意識內容にすぎない。かういふ意味で、徹底した主觀的觀念論は認識論上では內在論の形態をとる。內在論といふのは、意識を絕對化し、意識內容以外のものの存在を否認するからである。かやうな見解が唯我論の迷路から拔け出せないことについてはすでに述べておいた。

だが、意識から獨立に、意識の外に存在する物質的なものを認めたからといつて、直ちに模寫論が結論されるのではない。外界の實在が吾々の感官を「觸發」するとしても、人間の感官の構造上の特質や、思惟作用の特質のために外界の實在は人間の意識のうちに反映せず、模寫されないで、獨特な屈曲を受け、主觀的に構成されるといふ見解が存在する。ところでこのやうに外界はその本來の姿で認識され得ないとすれば、外界の物質性をも、ひいてはその存在をも承認することは出來ない筈である。不可知論とはこのやうな認識論、即ち認識は客觀的實在と合致し得ず、本質上、主觀的であるといふ認識論の謂ひである。すでに說明したやうに、カントやマッハの主觀的觀念論の出發點はかやうな不可知論的認識論であつた。吾々は客觀世界をそのあるがままに認識し得ず、ただ客觀世界が吾々の感官に

對して示す記號、象徴を認識對象となし得るにすぎぬといふ記號說・象徴說もまたその本質上不可知論的である。辯證法的唯物論者プレハーノフは、吾々の感覺は外界の象形文字であるといふ主張によつて、不可知論的誤謬を犯した。すべてこれらの見解は主觀的觀念論に行く可能性を持つてゐる。だから唯物論の擁護のためには確固たる模寫論の立場に立つことが必要である。

感性と思惟

ところで、客觀的實在が吾々の意識において模寫される、又は模寫され得る、といふことは、未だ必ずしもその模寫が完全だといふことを意味しない。一切のものと同樣に、認識能力もまた變化し、發展する。人間の最も原始的な認識能力は感覺能力即ち感性であつて、動物にも感性は具備されてゐる。それで、外界の對象は最初吾々の感性によつて把握され、感覺において吾々に對して與へられる。だが感覺を通して知覺され、表象されてゐる限りでは、客觀的實在は、個々ばら〳〵には明確に印象されても、聯關が明白でないために、全體としては極めて蕪雜に、漠然と模寫されてゐるにすぎない。感性的に模寫されるものは雜然たる多樣な現象形態であつて、そのなかを貫いてゐる合法則性、聯關、本質はいまだ意識において明晰化されてゐない。表象の渾沌のなかに合理的な聯關を見出し、それによつて外界の模寫をより精密に、明確にするためには思惟が必要である。

思惟は種々の表象間の一定の共通發表を抽出して概念を形成し、かやうな抽象の發展、深化につれて科學的概念が作り出される。しかし思惟は感覺的に與へられたものを、從つて多樣な表象を、隨意に整理し、組織し、體系付けるのではなく、渾沌たる感覺的所與のなかに秩序を作り出すのではない。思惟はただ秩序を、表象の渾沌のなかに發見するだけである。だからそれは、主觀的觀念論者が考へるやうに、秩序、法則等を構成し、創造するのではなくて、

本來的には感覺において吾々に對して與へられる外界の秩序、法則等をより明晰に模寫することを目的とするものである。かくて例へば思惟が感覺から獨立に、全く論理的に組み立てたかのやうに見える數學でさへも、本質的には感覺的に與へられる外界の量的關係の模寫以外ではあり得ない。

從つて思惟は感覺に依據せずには、それ自身の獨立的な働きをもつてしては、何ものをも認識する事は出來ない。吾々の想像のうちにしか存在しない神や化物も、實は知覺の恣意な、不當な組み合せから生じるものであつて、その起源は感覺である。感性から獨立な「純粹思惟」抔といふものは觀念論者、特にカント主義者の妄想の所產である。思惟は感性の發展の產物であり、感覺のうちに無かつたものは思惟のうちにも存在しない。思惟は感性と不可分であり、感性の發展が思惟を生み、その發展を促すばかりでなく、また反對に思惟能力の發展は感覺能力の發展を促進する。

感性や思惟の發展の根據には人類史の發展が横はつてゐることを忘れてはならない。同じ感性でも、感官の未發達な下等動物になるほど幼稚であり、同じ人類の感性でも、音樂家の聽覺や畫家の視覺と原始人や野蠻人のそれとの間にはかなりの相異がある。思惟能力の相異についてもこれと同樣である。ところで人類史の發展の基礎は生產力の發展であるから、人類の認識器官、認識能力の發展の基礎をなすものは、生產力の發展を與へる勞働過程である。

だが生產力の發展と共に發展するものは單に人間の認識能力のみではない。人間の認識そのものもまたそれと共に必然的に發展する。概念は本來の意味の言語を可能ならしめ、言語は一度び獲得された認識を傳達する可能性を與へた。かやうにして人類は先代から傳承された知識の上に立脚して、生產力の發展によつてもたらされる新たな經驗、

即ち客觀的實在の新たな側面についての感覺に照らし合はせてそれを一層發展させ、更にそれを後代に傳へ得るに至つた。文字の發明と共にこのことが何倍か容易になつたことは勿論である。

相對的眞理と絕對的眞理

人類の認識のかういふ發展において、新しい學說や理論がそれに取つて代はることを吾々は知つてゐる。だが今日眞理として認められてゐる新學說も明日はやがて誤謬を含んでおり不充分であることが曝露され、更に新しい學說がそれに代つて現はれるだらう。そこで、人間の有限な認識は誤謬から完全に自由ではなく、その限りつねに相對的な眞理であるといふことが判明する。しかし乍ら、もし吾々の認識の眞實性、眞理性が單に相對的なものにすぎないならば、吾々の理論は客觀的妥當性を要求し得ず、互ひに對立して讓らない諸理論の間にあつてその何れがより正しいか、より眞實であるかを判定することも不可能であり、吾々は懷疑論、不可知論の泥濘から這ひ出ることは出來ない。實際には、認識は單に相對的眞理しか持ち得ないやうなものではない。唯物論的認識論の根本原理たる模寫論は、吾々の認識が吾々から獨立な、吾々の外なる客觀的實在の模寫であることを確認する。從つて模寫論によれば、吾々の相對的に眞實な認識は客觀的絕對的眞理の相對的に正確な模寫だといふことになる。

吾々は觀念論者の考へるやうな知的直觀とか何らかの特殊な思辨によつて絕對的眞理を一擧にして完全に認識することは出來ない。吾々の認識はすべて相對的であり、誤謬の要素を含み、不完全であり、絕對的正確度を有しない。しかしそれは客觀的眞理の映像としては、單なる相對的眞理でなくて、同時にまた絕對的眞理の要素を含有し、從つてそれが客觀的モデルに大なり小なり近似的であるといふことは無條件的である。認識の發展は、人類が客觀的眞理

を益々正確に自己の相對的眞理のなかに反映させて行くこと、相對的眞理が益々絶對的眞理との完全な一致に向つて進むことを意味する。相對的眞理と絶對的眞理の區別もまた、他の一切のものの場合と同様に絶對的・形而上學的でなくて相對的であり、相對的眞理のなかには絶對的眞理の要素があり、人類の認識の發展過程の無限系列、その總和において、絶對的眞理は完全に擅有される。だが誤謬の契機を含む不完全な個々の相對的眞理も、客觀的眞理の大なり小なり近似的な映像としては、一粒の絶對的眞理を含有し、絶對的眞理を、大なり小なり不完全にではあるにせよ表現するものである。相對的眞理とは、人類の有限な認識のうちに反映した絶對的、客觀的眞理の謂ひであり、認識の無限な發展の結果においてそれは絶對的眞理へと完全に止揚される。だから客觀世界の種々の事實は、今日知られてゐないでも將來は認識され得るものであつて、認識の發展の絶對的限界、云ひかへれば原則的に不可知な對象、といふものは客觀世界に存在しない。吾々のすべての認識は相對的眞理であり、客觀的眞理の大なり小なり正確な、從つてまた何らかの程度において不正確な模寫であるが、認識の發展はこの模寫をより正確に、より深刻にしてゆくことにおいて成立する。

だから同一の問題について種々の相反する理論があるとき、その何れがより眞實であるかは、如何なる理論が吾々に感覺される客觀的現實に最もよく合致してゐるかといふことによつて決定される。吾々の認識は客觀的現實に完全に合致せず、客觀的眞理を完全に反映してゐない限りにおいて誤謬の契機を含んでおり、これに反し何らかの程度に客觀的眞理に近似してゐる限りにおいて相對的眞理である。誤謬と眞理の區別、對立もまた相對的であり、認識の發展とは相對的眞理のなかに潜んでゐる誤謬を次第に止揚してゆくことに外ならない。

認識の發展の問題、吾々の制限された有限な認識と無限な内容を有する客觀的實在の關係、相對的眞理と絶對的眞理の關係の問題は辯證法的唯物論において初めて正しく解決された。これに反し先天的範疇とか絶對者の如き想像上の絶對的眞理を哲學的にそのあるがままの姿において把握することが可能だといふ見地に立つてゐる多くの觀念論者は、吾々の一切の認識の相對性の事實と絶對的眞理の關係を正しく理解してゐない。ヘーゲルの如きは相對的眞理としての自己の知識の總體を絶對的眞理と見做す誤謬に陷つた。機械論者デューリングもヘーゲル流の絶對的眞理の把握の立場においてその哲學を展開しようと企てた。十七＝八世紀の唯物論者やフォイエルバッハは必ずしも吾々の認識が苦もなく客觀的實在を完全に反映するとか、直ちに絶對的眞理を完全に與へ得るとは見做さなかつたとはいへ、彼等は認識の發展の問題を提起せず、模寫論に辯證法を貫かせることが出來なかつた。彼等は認識をその發展、その歴史の見地から考察しなかつた。

マッハ主義は、認識の相對性と客觀的眞理との間の辯證法的關係を説明し得なかつた形而上學的唯物論の認識論のこのやうな弱點に乘じて出現した。吾々の認識が制限されており、客觀的現實に完全に一致せず、常に相對的にしか眞實でないとすれば、認識は總じて外界の模寫ではなくて人間の隨意な構成であり、從つて科學的認識とは吾々が感覺的所與の多樣を人間生活の事情や必要に應じて便宜的に整理し組織したものである、といふのがマッハ主義の主張である。マッハ主義は認識の發展を辯證法的に理解し得なかつたために、認識の相對性を一面的に誇張し、絶對的原理に高め、客觀的眞理を否定し、かくして不可知論に轉落し、そこから更に主觀的觀念論に陥つた。客觀的實在を、即ち客觀的眞理を否定し、吾々の認識を單に相對的眞理とのみ見做す認識論、いはゆる相對論は不可知論・懷疑論を